

同人雜誌

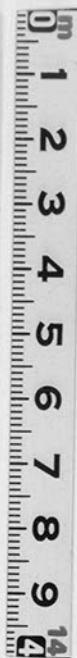
港

の

灯

合併

五六月號



港の灯目次

(昭和二十四年五月、六月號)

「卑怯なる港の灯主幹」との手紙に答へて……主幹 東	短歌「標身」……鹿 野 卓二 郎 (九)	小名濱小唄……古 茂 田 信 一 (八)	お春のじやがたら文……鹿 野 卓二 郎 (九)	詩 救國文藝の確立……樋 田 芳 馨 (二)	白璧の夢……泉 敏 夫 (四)	掌 篇小説「初會合」……宇 佐 美 踏 生 (六)	風 愛 賞 中 相……泉 敏 夫 (八)	戀 愛 賞 中 相……泉 敏 夫 (八)	詩 永 遠 の 愛 慕 (二)……加 藤 弘 四 郎 (三)	痴 人 の 獨 白 觀……角 野 道 夫 (六)	詩 人 生 觀……角 野 道 夫 (六)	創作「縁ありて」……(日素) 樫 山 大 三 郎 (五)	父兄會を阻むもの……(日素) 樫 山 大 三 郎 (五)	新 會 員 紹 介……田 中 八 十 翁 (七)	春 待 つ 感 想……田 中 八 十 翁 (七)	長篇小説……東 鈴 木 義 三 男 (五)	表紙 紙 執 筆……東 鈴 木 義 三 男 (五)	編輯後記「合併號發刊に就いて」……東 鈴 木 義 三 男 (五)
---------------------------	----------------------	----------------------	-------------------------	------------------------	-----------------	---------------------------	----------------------	----------------------	--------------------------------	--------------------------	----------------------	------------------------------	------------------------------	--------------------------	--------------------------	-----------------------	---------------------------	----------------------------------

「卑怯なる港の灯主幹」との手紙に答へて

主 幹 東 義 將

巻頭の文としては、甚だ妙な標題で有るが、最近筆者は甚だ興味有る手紙を受取つたので、茲に是を公開して、諸氏の批評を乞ひ度いと思ふ。尤も此の手紙を興味有るなどと云つては、折角第三者に代筆迄させて、筆者に憎しみを寄せて來、人物に對して、甚だ氣の毒では有るが、筆者としては、そう申上る以外に言葉が無い。又こう云ふものを掲げて見ても、日頃筆者が、巻頭の文に於て會員諸氏に、文筆に親しんで載く様にお願ひして來た事と、何等關係もないが、併し是も、筆者を通じての、港の灯への第三者の關心を知る上に於て、若干は役立つ事文は確かであろう。唯筆者は港の灯發刊以來、投稿並びに激勵のお便りは頂いたが、かく惡意有るものを受取つたのは是が初めてで有る。勿論、此の手紙が何人であるかは詳らかにする事は出来ない。元より、本人が判らない様に努力してゐるのだからこつちで判り度いと思ふのが無理で有る。

差出人は西方の一會員。小舎齋として有るが、當人が西方と云ふのだから、西方以外の所に住む者と思つたら、間違ひあるまい。封筒の手筋と内容の書体とは、相違してゐる。中味は女手だが、若い人の字とは考へられない。おそらく妻君にでも書かせたものだろう。他人がこんなものを書く事を引き受けるわけが有るまいと考へるからで有る。用紙は便箋でもなければ罫紙でもない。今時では一寸珍らしいうすい良質と云へる白紙で有る。よく役場などでは使ふそうで有るが、筆者は未だ是を識らない。併しよく役場や警察へ呈出する書類に使はれてゐる様な白紙で有る。封筒に書かれた文字は墨汁で有る。墨汁などを使ふ事も是も特異の職業又は立場の人で有る。

いさゝか穿鑿的では有るが、此の位の事は當然の興味として許される事と思ふ。

本文にかゝる前に、お断りして置き度いのは、本文の間々に、一段低く述べたのは筆者がその文に對して検討を加へたもので有る。本人は、本誌會員の如くに云つてゐるが、筆者は此の人物を、本誌會員とは考へて居ない。その點に就いては後述する。尙言葉使ひを可重に持つて行つてゐるのは、此の人が自己の文章を隠さんが爲と思ふ。

「港の灯の發刊以來、私が最も興味を以て拜見致して居りますのは、その巻頭記事なのです。何故かと云へばそれは港の灯の主幹する氏が書かれるものであり、それを讀む事は港の灯を最もよく理解する方法でもあるからです。さてそれを拜見して居りますと、氏がその投稿作品の撰擇に對しては、いろ／＼と頭を悩まして居られ又努力せられて居られる事がよく知られ、私もその嚴格なる掲載態度及方針に對しては深く賛成致すものであります。」

筆者は此處迄讀んで、はてな？と思つた。此の人は甚だ書き馴れてゐる人で有る。然も巻頭文に注意を拂ふ様では相當本誌に對し深い關心を持つてゐる人でも有ると思つた。如何となれば、筆者が毎號書く巻頭文は、あれを讀まない人も相當有るので有る。又何故此の位の文を書く人が今迄本誌に投稿がなかつたのかとも考へた。

「昨日たま／＼第四號を手に入れましたが、その中ではじめてT生が氏のペンネームである事を知りました。と同時に私は港の灯の大部分を氏の作品で埋めて居る中に、どうしてあれだけはペンネームを用ひられたか、又第四號に於て氏が致して居る所の辯明―氏の巻頭文には總べて多分に自己辯護が含まれてゐるのだが―についていさゝか疑問を抱いたのであります。先づ第一に「併しづれにしても大して譽められる作品ではないから筆者としてはそれに對しては先づどうでもよい」と云はれて居る態度であります。各號の巻頭文の中にあれだけはつきりした事を書いて居られる氏が、どうでもよいと考へられる作品を、何故に掲載したかと云ふ事は理解に苦しむものであり又郷土の同人雑誌啓蒙雑誌を任ずる港の灯の會員を侮蔑するものであります。」

自分は四月號誌上に、上記のT生の件が辯明と云ふ様なものは一ツもしてゐない。尙「氏の巻頭文は總べて多分に自己辯護が含まれてゐるが」と、そろ／＼惡意が含まれて來たが、自分は今迄いづれの文にも自己辯護などは用い

た事がない。そんな必要が無いので有る。又「どうでもいい」と云ふのはあの文が作つた人間を誰れ彼と争う程の価値は持つてゐないと思つたのみで、どうでもいい作品を載せたとの意味ではない。うつかり謙遜の言葉も書けないものだと思つた。

「次で野郎心は方面に於ては好評であつた」とあるが、具体的にどういふ方面に好評であつたのでせうか、T生の作品に對する相手は小名濱町中に鳴り渡つたであらうか或は太平洋の荒波に掻き消されて終つたか」

あんまり無理は云はないで載き度い。「好評で有つた方面を具体的に示せ」と云つた様な事を云つてゐるが、此の人に本誌の會員録を見て、會員の散在を知つて貰い度い。誰、考へてみたが、筆者の作品も太平洋の荒波には確かに適はない事丈認めざるを得ない。

「又多少のエロテックは感ぜられたかも知れないが、あれに依つて卑猥な感情をそゝられたとは筆者には考へられない。(尤もな事)しかし筆者に自己の趣味とする小説を過去一、二年も筆を曲げて是をエロ小説に走らせていたらあるひは筆者は東京の雑誌にその名を連ねてゐたかも知れなかつたのである。」

その上御丁寧に、此の事は當小名濱に於ても知る人ぞ知る絶對の事實なのである」と、これは何を言はしてゐるのか、絶對的な事實ならどうしたのだらうか。」

余り口惜しがらないで載き度い。何故にかくもお腹立ちか、一寸解釋に苦しむもので有る。實に一昨年東京の出版社の某氏が、自分に「あなたは是丈に書くんだから短篇を二ツ三ツ書いてみたらどうです? それはやはり小名濱の岸壁なんかを題材に、夜の女でも配して、そうすれば必ず載せて上げますよ」と、云つて呉れたのを文章には前後の連絡から力強い語句を使つた丈で、別に自慢したわけでもないから、そう怒らないで載き度い。當地の某氏のお宅での事で有る。別に他意は無い。唯、自分は此處迄讀んで來て、此の人は決して本誌會員でないと思へた。如何となれば、此の人が此の章で腹を立て、云つてゐる事は、筆者が二月號の巻頭の文に書いたもので有る。二月號でかくも反感を持つた人が、三月、四月と會費を拂つて港の灯に止どまつてゐるわけはない。

「先へ進もう。エロ物も小説の様に書いてあるものが多いが、元來小説と云ふものは讀んで作者の言はんとする意圖を知ると共にその文から來る情景が直ちに映畫の如く走馬燈の如く否それよりも尙早く讀者の頭腦に寫る事を以て小説の成巧の大半と考へる。世には情景を……しかるにエロ小説には少しもそれが無いのだ。つまり自分の頭腦で無理に情景を描くのである。印刷である……かくてエロ小説はエロなる故にエロ小説でなければ何なのでせうか、又讀む人の氣持ち如何に依つてエロ小説と小説の限界がつけられて行く様にも思はれます。」

エロ小説を讀んで自ら妄想をたくましうした様な讀者が、T生の作品を讀んだ時には……疲込んで讀んだか知らないが、妄想を起さなかつたのであらうか。」

「先へ進もう」とのお言葉は結構だが、こんな風に先きに進まれては大いに恐れ入る。第一エロ小説と云ふ言葉は別に自分が創始した譯ではない。エロ小説と稱するものは確かに有る。但し冒險小説とか探偵小説或いは現代小説人情小説等の如く、題名の頭にはくっつけこないから、一寸お判りに成らないかも知れない。

唯T生の作品を讀む人が變轉んで讀むか起きて讀むか、あるいは妄想を起すかどうか、どうも其處迄自分は氣を使つて書かなかつた。自分はそれ程卑しくはない。

「氏が多少のエロテックは感ぜられたかも知れないが」と認めてゐる作品にのみペンネームを用ひられたと云ふ事は、あの様な作品にはペンネームの方が似合ふからと云はれ、ばそれ迄ですが、私はその裏に氏の卑怯な打算的意圖があつたのではなからうかと疑ふものであります。」

「その裏に氏の卑怯なる打算的意圖」と有るが、ペンネームを用ひた事が何が卑怯で、何が打算的なのだろか? 現在の自分の立場で此の事に關する限り別に打算的に出る必要の何ものも存在しない。成程「T生の作品」に自分の氏名を用ひなかつた事には確かに理由は有る。別に大した事ではないがあの文の中のT生なるものは甚だ客姿がよく、それに伸々好男子とされて有るのだ。しかも自分はそれを一人稱で書いてゐる。東義將と書いておいて、「容ぼう風采自信有り」とか「色小黒きも男性美!」とは、一人稱執筆では一寸やり惜しい。中央の雑誌と事が異ふ

然し此の手紙の本人がこうした點を打算的として書いてゐるわけでない事は確かである。

「そして當然わかり切つた事を云つてゐる砂押氏のクエロは迎へるべきである云々を引用して、筆者も確かにそうであらうと考へると云ふ所に至つては思はず苦笑致しました。」

此處に至つては砂押氏に迷惑を掛けてしまつてゐる。併し此の人は甚だそつつかしい本の読み方をしてゐる。自分があの文の中に砂押氏の卓上に有つた本との例を挙げたのにそれを勝手に砂押氏の言葉と解してゐる。しかもこの處を読み通すと何んとなく砂押氏にすら反感を持つてゐる人の様な印象さへ受ける。

「長く書いてしまひましたが、エロダグロなど今更に取上げてさういふ問題でありますまい。エロ小説：特にエロ小説などはどだい存在する筈がありません。マツチの火を見ても火事だとあわてふためく御人も居れば、ボヤだから火事ではないと落着いて居る人もあります。この様になると氏のエロ講義も私のこの手紙の様にしどころもどろになつて終ふのではありませんか。私は終りにもう一度云ひたい、エロ小説など云ふ白物はあり得ないと」

以上で此の文は終つてゐる。故意に途中で切られて有るのだ。然し此の手紙を掲げた結果に於て、筆者は諸氏に申上げ度い事は、本誌の如き、諸氏の御協力を載き、些かでも郷土の文化の向上に微力を盡し度いと希いと、郷土の人々の作品を發表して、互の歡びとしたいと意欲以外に他に何ものもなく、極めて穩健に／＼と雑誌の方針を持つて來て、唯純粹の仕事をして來たものに對してさへ、會員でも無い立場から、ある種の嫉みと反感を持つて、態々手数を掛けて他人を不愉快にさせ様と努力する人間の存在すると云ふ事である。此の人物が本誌の二月號と四月號のページをめくり乍ら、此の手紙を書いてゐる姿を思ふとむしろ氣の毒に成つて來る。人を憎む者は自から不幸である。港の灯が決して永いものとは筆者も考へてゐない。併し港の灯は開散しても郷土の人々の今日迄の港の灯への深い關心を思ふと他日必ず、より良い投稿雑誌が再び郷土に出現する事を筆者も是を堅く信じる事が出来る。

唯筆者はその時に於てさうした事を計畫される人々の爲に、澤山の中には上記の手紙の主の如き變つた性格の人物も存在する事も知つて載きそれを計算に入れられる様にとの警告の言葉として殘して此の稿の筆を結ぶもので有る。

短歌 裸 身

瀧 端 滋 子

やゝぬくむ陽ざしとなりて芽柳のふゝみ幽かに晝も長けたる
陽に芽吹く楓若葉の香に顯ちて眼にあざらしよ春も蘭けつゝ

よく伸びて麥生のみどり紋日のむつみ夏めく照りの穩しさ

我が想ひほぐれつゝありここに來て蝶のむつみは見つゝ久しき

たらちねの賜ひたる着物うち拂ひせつなく朝のかぐみに向ふ

三十路過ぎしこの身むちうち勤すと遂の決意は告げて文書く (母へ)

おほかた我が持つ物の失いて裸身にもひとしき今を働く

なれぬ身は勤の日々を綿の如つかれて春の華やぎもなく

散る花の車窓に佇しも今日も又植田大昭炭礦と云ふに勧誘に行く

足許より崩るゝ心地明日の日の生きざま思へはだゝにかなしく

ねもごろにいたはられつゝ歸り來て夕づく雲の動き寂しも

拭きぬけて木目美しくつやめきしこの長火鉢うらねばならず

このつやのかがやき輝りや愛しみつうるせつなさは耐へて拭き拭く

小名濱小唄

古茂田 信 一

一、春の公園おぼろに暮れりや
花にそぞろの二人連れ
宵の薄月人目をしのぶ
雲の蔭ゆく裏をゆく。

二、風も涼しや波音乗せて
君と逢ふ夜の潮見橋
誰を松風未だ來ぬ人に
潮の満干が氣にかゝる。

三、沖の燈臺夜霧に濡れりや
戀も思案のあの波止場
せめて一夜を情の夢に
懸けて君待つ小夜時雨。

▽ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼

秘 話

お春のじやがたら文

鹿野 卓二郎

ばてれん教徒

時代はエルベルフェルトの剣首に遡る。そして舞臺はジャワ島バタビヤの街から日本の長崎へ……有名な島原の亂の二年後、寛永十六年（西暦一六三七年）のことである。ばてれん教徒の悪夢に怯えた時の幕府は、紅毛人の血類として二百八十六名をアマ港に流した。更に、同十六年平戸、長崎にある異血の男女十一名も、ただ父を紅毛人に持ったが故に逢々蘭印ジャワ島のじやがたらへと流されたのであつた。

此の中、延寶年間（西暦一六七〇年代）にまだ彼地にあつて生存してゐた邦人が七名あつた。村上武右衛門、山崎甚左衛門の姉で、宗名エステル、濱田助左衛門の寡婦某、峰七兵衛の姪春（以上長崎）判田五右衛門の娘で宗名コルネリヤ、谷村三藏の召使菊、立石清之助の妹宮（以上平戸）がそれである。

美はしき混血娘

お春は、長崎の士、峰七兵衛の妹を母に、和蘭人を父として生れた、眉目美はしい混血の娘であつた。厚い母の愛情を一身に享けて草紙などを習ひ、伶俐に育つた娘であるが、十四の年突如として襲つた追放の嵐にもまれて、全く寄る邊ない身を異邦じやがたらの土と化さねばならぬ天命が、彼女にはたまらなく悲しかった。折しも船出の前日である。此の二、三日母親からの心盡しの晴着を着せられてゐたお春は、すぐ近くにある、寺小屋仲間おつたの家に飛び込むと、ワアツと泣き乍らおつたの膝にとりついた。

「おつたさん、あたし行つちやうのよ、あなたの知らない處とつても遠い處なのよ……」

お春は、涙ばかりが先にたつて、自分では何を云つてゐるのかちつとも分らなかつた。お春の不憫さに、じつと嗚咽をかみしめてゐたおつたは、庭の山吹の前まで彼女を連れ出したが、何を考へたのか部屋に戻つた。涙を拭いて來たのであ

らう、再び出て来たおつたの手には、日頃何よりも大切にしていた美しいお鳥の羽二、三枚と、数葉の短冊が持たれてゐた。

「これ形見に持つて行つてね、じやがたらの國に……」

じつとかみしめてゐた鳴咽が遂に堰を切つて、おつたはこれ以上お春と話すことは出来なかつた。そしてその習日、お春はじやがたらに向けて出帆したのである。

あゝ故國の山吹

じやがたらに着いて珍らしい物を見、聞きたびに望郷の心は一杯になるばかりで、母やおつた、それに何時でも自分をかばつて呉れた平吉の顔などが、次々に思ひ出されるのみである。

「あたしは當到じやがたらに來てしまつた。然し、何うしても鳥の人達には親しめない」

色美しいスレンジングやサロンクで腰の廻りを巻いた表情の判らないじやがたらの娘達が、よく沐浴したり、洗濯をしてゐる川の傍を、故郷戀しの悲しみを胸に秘めては歩いてみることがあつた。

三月も終りに近づき、南國の春が強烈に輝きを見せ出したある日のこと、お春は懐しいおつたと平吉の便りを受け取つた。涙にかきくれながらおつたの手紙を開いた時、はらりと彼女の膝もとに落ちた物がある。

色は褪せ、形はこわれてゐても、それはまさしく故國の花

八重山吹の可憐な押花の一輪であつた。手に受けければ、やさしいおつたの心根が眼にみえる。しばらく茫然として、涙のうちに故國の春を偲んでゐたお春は、さらさらと筆をはしらせた。

山吹の花のちしほはかわるともいわぬ色をばわれ忘れめや諸共に植えて眺めし山吹の散りても春の面影を見る

お春にとつて此の二、三日は凡て夢の樣であつた。手紙をしたためようにも、こみあげる感情はなかなか筆にのつて來ない、それでも明日は船が出ようと云ふ四月一日になつて、心急ぐままに、暗い灯をかきたてながらやつと筆をとつた。かうして書かれた、お春の「じやがたら文」は、三千里の遠い島から流れ漂つて來た水藻の跡が餘りにも美しく、且清らかであつた爲に、なほ千載に残るのである。

水くきの後は涙

「千はやぶる神無月とうらめしの嵐やまだ宵月の空も心うちくもり時雨とともに郷里を出でしその日を限りとなし又ふみも見じ、あし原の浦地はるかにへだつれど通ふ心の送れねばおもひやる大和の道の遙けきも夢に間近く越えぬ夜ぞなき御ゆかしきまゝ腰をれかき付まいらせ候前業とは申ながらかかる憂世にかひなき命ながらへ申さんよりはただ世になき身となり候はば如何に嬉しからましをたまま花の世界に生れつきて此の身となれる年月を數ふれば十とあまり四とせがほどゝこそおばえ候に、かくうらめしき遠き夷の島に流され

つゝ、きのふ今日とおもひながら、はやみとせの春もすぎけふは卯月朔日まで東雲にあすは船出と人の聞えつるにせめて筆の跡しめても存じ涙ながら硯に向ひまひらせ候

また夜深きほどにいたふ暗ければ灯すごごとかゝけつゝおもひ出る事共書續くるに、此の文のうらやましくも故郷に歸るよと思へば我文ながらありしよりけに物悲しくて

水くきのあとは涙にかきくれて昔を如何に人の見ましやたまゝ故郷にて見申したるおなじものとは月日の光ばかりこそどこにかはらず候ゆえ晝は日の出る方を眺め夜には月の出る方を打ち眺め袖の乾く間もござなく候

稗とはなり申さず

幾よろずの人か此の世に生れ來るに我身いかなれば異國の人の子と生れ出たることも前の世の報ひありてこそと思ひまいらせ候、さりながらこのまゝに果てなんと存じ申さず候ただ一度神や佛の御あわれみにて日本へ歸り申すべしこそと思ひまいらせ候、たゞえ三日を過し待たで消え果てまいらせ候とも聊かも苦しからず候、平吉様へ申しまいらせ候、御無事の由めでたく候、しかれば何とて毎年御文くだされ候や、それのみ不審に思ひまいらせ候；我身こそ今までは異國の衣裳一日も致申さず候、異國に流れ候とも何しにあらるびすこはなれ申すべしや、あら日本戀しやゆかしや見たや……

(原文抜萃)

妙齡の混血兒お春の手紙は唐船に託されて長崎のおつたの手許に届いた。「じやがたら文」は實にお春の身代りに長崎

の土を踏んだのである。「あらゑびすとはなり申さず」と言つたお春も間もなく唐人に嫁して子をなし、七十五、六の老齡を保つて、元祿年間に世を去つたのである。

お春の訃報は、その子が日本へ知らせて來た。勿論長崎へである。常夏の國ジャワ島に今尚残る「カンペンヤニツボン」の地名と、バタビヤの元日本領事館前に安置されてゐる原惣兵衛の墓碑は、過ぎにし古の日本、ジャワ交易史の陰に隠れた哀話を秘めてその名残りをとどめてゐるのである(完)

落の臺 黒澤 秀雄

落のとうよお前は毎年

のどかな春を忘れずに

芽を出してくれる

お前は生々とした香をもつて

可愛い、全身で私を招く

私はお前の傍らに横になつて青い大空を眺め

自然を讚美して

ひねもす日の暮れるのも忘れた。

(黒澤氏は山形から小名濱に見えてゐる人、二十才)

救國文藝の確立へ

樋田芳馨

この程、本誌の東義將氏から、青年を啓蒙し得るやうな、文章の寄稿を戴きたいと云ふ、註文に接したのであつた。この私が、いかさまその任にあづかり得るやうな人材だと思はれては、今更這入らうと思ふ穴はなし、さて押入れの中はボロと紙屑とで一杯だし、五尺の体かくれ場もないと云ふまことに以てお恥かしい限りである。

言ふ迄もなく、私と云ふ存在は、現代青年を指導したり、啓蒙し得るやうなそんなすぐれた力もなければ、勿論これと云ふ才能もない、寧ろあんまり自慢にもならないが、小學校卒業と云ふ學歴一筋。これだけは絶体に自信を持てると云ふ分際でしかないのである。

だが因縁と云ふものは、實に不思議なもので、幸ひなことに私には尊敬すべき二人の師を持つてゐる。私はこの二人の師についておくれればせながら或る學究に精進してゐる一老學徒に過ぎない。そしてどうやら人並の悦びは授けられ、智慧も與へられ、そこに培はれて來た、一つの主義と信念とを後生大事に固く握んでゐると云ふだけのこと、その外のなにも

保證し得られやう。

彼等の手練、手くだに對して、何等根底的な教養と信念とを持たない日本の青年層が、易々諸々と簡單につれ込まれる如きことがあつたら最後、何にも言ふことはない。日本はそれで完全に暮である。吾等は今これを民主國家日本の爲めに、憂いても憂いても尙寧日なしである。敗戦でも尙亡びなかつた日本がかくて彼等の手に依て完全に亡國の運命を辿るに至る。さう簡單に行くものかと、高をくくつてゐてはならない。

その考へが最も危険なのである。すべては進むところまで進んで來てしまつた現代なのだ。もう熟し切つてしまつたのだ。油斷は絶体に禁物である。この今が大事なのである。

斯くて吾日本が、彼等の思ふ壺に這入つてしまつたとしたら果して吾等國民はどうなるのか、言ふ迄もなく、天皇も、民主主義も、米國の援助も、私有財産も乃至今日の社會制度も全部が洗ひさらひ棒引きである。そして日本は、完全に個立されてしまふだけの話だ。「たといどうあらうと個人的に幸福になれたら良いじゃないか」と、平ちやらばうをきめ込んでゐるものがあつたらお芽出たいと云ふよりは寧ろ國賊のたぐいである。

ところが遺憾せん、農民、勤勞階級等にこの種の人類がざらにあるのをどうすることも出来ない現状なのだ。何んたる淺はかな無責任な物の考へ方であらう。佛教ではこの淺識と云ふのを法謗罪として眞向から排撃してゐる。

でもあり得ない。慙ふした頼りのない存在だから、その學究だつてたかゞ知れたこと勿論である。でも私はこの師の説を嚆矢に丸呑みにする程の學徒ではありたくない。

斯くて私はそこからどうしても私獨自の人生觀、社會觀、國家觀、宇宙觀をうち樹てたい。そこに私と云ふ人間の妙味がある所以である。この筋合を以て、敢て本論に入りたいと思ふ。

今の世相に向つて、ちつくりと落ち付いてより深く思ひを馳せるに吝でないならば、そこには何んと恐しい惡魔の手が恰も手親善の像のやうにうだぐと伸はされてゐて、氣味の悪いつのだだけの思潮が、民主國家日本の全土を思ひのまゝに吹きたぐつてゐると云ふ事態に氣付かれるのである。之れを今、直截簡明に言ふならば、共產黨、あの一味の活躍がそれである。

彼れは既に、世界の平和を愛好するものゝやうな、美しい装ひと技巧を凝らして、さもないぎんに、吾が党に來れ集れと蜜のやうな美味と微笑とを振り撒くのである。而も近來に至つては日本の天皇制さい尙除々に認めてもよろしい等と心にも無いことを平氣でほめかしてゐると云ふに至つては、いよ／＼以て其の奥の手を出し、まんまと日本全人類を煙の中に捲かふとしてゐるのが窺ひ知れる。こゝに於て吾等良なる日本國民の各層がひらりと身をかわし、「よしそれならば」と今にも彼れと手を握らう等と云ふやうにならぬとは誰れが

すべて薄つべらなものと考へ方ほど社會を誤り、國を毒するものはない。

こゝに於て、私は青年諸君に申し上げたい。それは單なる私の自惚れや自負ではない。増上慢でもない。日本人としての眞の雄叫びである。即ち之れを要約するならば、御座なりの民主主義では當底眞の日本再建は覺束ないと云ふことに盡きる。なぜならば、今の日本の民主主義はやゝもすれば共產主義に捲き込まれる弱味が多分にあるから駄目だと云をのである。之れを要するに日本國体に根ざした、日本獨自の民主主義でなければならぬと言ふのである。ポツダム宣言には日本は日本獨自の民主主義を打ち樹てよと既に明示されてゐるではないか、なぜ日本はこの宣言に基いてやらぬのか？

日本獨自の民主主義、それは日本國体に基磐を据へた民主主義のことである。所謂吾日本國に於てはどうしても日本國体に根ざした民主主義でない限り絶対に永劫性、健實性がないのである。國体に基磐のない民主主義、それは根なし草であり、空念佛に終るだけだ。よろしくこゝの呼吸をしつかりと把握すべきである、これをしつかりと把握したならば、更に吾等文藝を愛好する者の是非とも知らねばならぬことが一つあると思ふ。即ち何時の世、如何なる國であつてもあらゆるものはその基磐が思想と文藝の中に存してゐたと云ふ事實である。

由來戦争も、革命も乃至平和も、その根源をなすものは、この思想と文藝とにあつた。

白晝夢

泉 敏 夫

それは歴史が明かにこれを物語つてゐるのである。恁ふ詮じつめて来る時はじめて吾等はこの思想と文藝の持つ役割と云ふものゝ偉大性を知るのである。この意味に於て思想家と文藝家の使命はまた一層重大である。

吾郷土の文藝青年が、この點に深く思いを寄せて、より健實に、よき聰明に、今を流るゝ時代思潮の運行と機微とによく觸れよく透徹し正しくそして新らしい自覺に根ざしてあの薄つ平な物の考へ方を今こそすつかり清算することに依て、而も人類最高の道義の中に純情なる正憶念を把握することこそ肝要なれと思ふ所以である。

そして、こゝから醸し出される文藝を、思想を、より完全に育て上げ、今や危機存亡の岐路に立つ吾が國の爲めに一段とお役に立つやうな立派な行績を残して欲しいものである。

郷土文藝青年諸君。よろしく輝かしい、救國文藝の創造に緊陣一番勇猛精進しては欲しいと思ふ。

(了)



土まんぢうの墓
をさめねむるおくつき
あゝ春はいくたびか立返り
いくたびか花をその上に散したことか
なきをとめのおくつきよ
生前お前はやさしい心の持主だつた
日は暮れて行く
花ならぬ彈をあびし戦友のおもはよ
今し沈む太陽の光を受けて
墓標はおごそかに立つて居る
故陸軍一等兵東海林雅夫：と
東海林よ、いよ／＼やつて來たぞ
この俺が 野ばらをきりたはし 彈で凸凹になつた路を
つまづき／＼やつて來たぞ
さあ、お前とのみあつた水筒の水だ
花はお前の胸に受けて呉れ 草木はふか／＼と茂り
味方は敗退に次ぐ敗退だ 東海林、東海林
お前は俺の聲が聞えないのか
あゝ現は遠く祖國へ還り なつかしの母のみ胸にいだかれても お前は二度とかへつては來ない
東海林 あゝ お前はまだまだまつて居る
南の果ての この密林の中に
(同人、小野榮氏)

掌編小説

初會合

宇佐美 踏 生

幸枝が初めて宇野弘造と言ふ青年を訪ねたのは、春雨のひと／＼降り続いた日の午後であつた。幸枝も宇野も同じ同人雑誌に寄稿して居た關係で、その名前だけはお互いともよく知りあつて居た。「一休全体どんな人かしら?」幸枝は少なからぬ期待と好奇心とを持つて青年との會見を待ち望んで居た。初めて彼を見た瞬間、彼女は「ハッ」と驚いた。それは餘りにうひ／＼しい坊ちゃんらしい若い男で、神經質的な色の青白い二十四、五才であつた。

どんな女性にも馴れ／＼しく、言葉かける今の文學青年を幸枝は想像して居た。此の眞面目な温厚な且無口な青年を妙にあつてなく感じた。お人達ひぢやなからうかと言ふように幸枝は何度も彼の青年の顔をぬすみ見た。

りんかくのはつきりしない丸顔、張ればつたい險の下に清く澄んだ黒い瞳、一文字にひきしまつた唇! 何度見直しても相手は生眞面な若人だつた。そして何故か親しみ難い窮屈さを感じられた。初對面の異性に對する或る羞しさ遠慮か

らでもあらうが、滅多に聲も立てゝ笑つたりはしなかつた。それが幸枝には冷酷に思はれ厭だつた。然し若い男女が話も進むにつれて少しづつある温たかみが通つて來、遂にはたわいもない話に夢中になつたりお互いがにつこりしたりした。相手が少し打とけてくると、幸枝は何時ものはやい氣持になつて、はき／＼思つて居る事を平直にしゃべつた。「あなたには戀人がありますか?」と幸枝は何氣なく聞いた。青年は女の笑調子な、しかも不遠慮な質問に多少慌てたらしいが、別に氣嫌を悪くした態もなかつた。「戀人? ハアハア：僕にはそんな、居りませんよ」青年は心もち顔を赤らめて幸枝の視線を避ける様にそつと横をむいた。そのうひ／＼しい浮世馴れぬ姿が幸枝には嬉しかつた。普通の男だつたら、強くそれを否定して大膽な凝視と媚とで女の心から何かを捕えようとするであらうに。……

(終)

(平市常盤鐵工場勤務、二十才)

△ ▽ ● ●

嵐の中に

興田 薫

びゅうくくく。

凄い嵐だ。

舟は揺れる。波は荒れる。

大洋の眞只中に舟を操る自分。

自分の一切は悉く投げだした。

びゅうくくく。

凄いうなりだ。

自分一人だ。然も傳馬だ。

嵐よ。

さあ。

お前なんかに負けるものか。

おれの腕が強い。

お前の力が強い。

あゝ。

舟の中まで水が来た。

足が冷たい。

然し俺の胸は暖かい。

舟は沈みかけた。

自分は海中に飛び込んだ

岸を目掛けて泳ぎ出した。

咽喉は辛く、目も痛い。

自分は泳げる丈泳いだ。

行ける所まで行くんだ。

嵐は聲をひそめた。

自分は島にたどりついた。

陽は力一ぱい輝き始めた。

そして、

微笑んで海面の上を躍っている

春雨の夜に

興田 薫

静かな夜だ

春雨は音もなく、しめやかに降

り始めた。

私の心は渾しない深い悲しみに

浸っている。

幾度か溜息をもらし涙ぐんだ。

私を思慕したあの子達……

私も思慕したあの子達……

こもくとして渾しない思ひに

耽る。

淡い過去のみにくくしては

いけない。

もつと／＼お前には強い使命が

ある筈だ

ざあ／＼。ぼたり／＼

雨は降りしきり、雨だれの音も

烈しく聞える。

さうか！ さうだつたのか！

あつ！ 夜が明け初めた。

太陽が昇る、凄い勢だ。

私は何物をも忘れ、太陽に祈り

を始めた。

（一九四九・四・一四晩）

×

×

×

×

戀愛實相

伊 藤 怜 子

啓子さん、どうしてそれを早く私に、お話ししてくれなかつたの。私もその事をもっと早く知りたかつたわ。啓子さんに對する私の熱意が足りなくて、それで私には打ち明ける價值がないと思つたのかしら。でも私は情熱以外の何かで、早く貴女の相談にのりたかつたわ。

啓子さん。そんな、小さな戀愛問題にくよく／＼なんかしないで、強く生きませうよ。私が貴女の戀愛を、小さななぞと云ふ事を許して下さいね。

これから何をお話ししようかしら、私の心の中を聞いて下さる？

孤獨を愛する人は、愛を求めてゐるのだと私は憶えてゐます。そして私は、その言葉を今も尚、眞實だと思つてゐます。孤獨になる時、私は凡ての愛も自分の愛する心も何も無に成つてしまひます。そして自分をうるさくするものから、遠ざかるうとさへするのです。

人は、思ふ存分自己の存在を知つた時、自分の求めてゐるものに氣づくのではないでせうか、そしてそれが愛であるといふことを、……

啓子さん。貴女は愛に飢えゐたのよ。それだけに、自分を愛してくれるものが近付いて來ると、盲目的な心境になり勝ちになつたのよ。

誰でも人は異性を愛する心が生れた時は、本當に幸福である事を感じます。併し異性に愛された時は、誰しも自己に自惚れもち勝ちです。又確かに戀愛は、その人をより強くさせるものです。それはもう啓子さんもよく、御存知の事でせう。併し私は、感情にのみ走る戀愛は好みません。又肉体的な戀愛も排斥いたします。私は唯、理性に満ちた、そしてその中に生れた情熱を重大視いたします。それが私の戀愛觀なのです。プラトニックな戀愛は、私達の情熱と理性によつて造られるものです。

然し私は戀愛結婚は好まないのです。何故ならそれは眞の戀愛が少ないから私には淺慕なものにしか考へられなかつたからです。戀愛結婚が多いだけに離婚が多いアメリカ映画が私にそれを實證してくれてゐる様に思はれます。

啓子さん。貴女も、自分に充分の自信をもつて、生活なさいます。そして過去の悲しみを精算いたませうね。私も今新しい道を歩んでゐます。

啓子さん、實は私も戀愛致しました。

その人は海で働く人でした、併し、私の運命はその様な人には向いて居りませんでした。又一口にいへばその人と私は、まるきり互の考へ方が違つてゐたのかも知れません。私が情熱を越えて、互にもつと、深刻にそして、眞實に成

ろうとして、ちつと自分達を見つめた時、それが、自分の眞の戀愛ではない事に氣付きましたの。

私は遂にその人と別れました。勿論私も啓子さんと同じ様に泣きましたわ。それからは私は、唯自分を作る事ばかりに努力してきました。讀書によつて考へ方の深みも加へて行つたつもりです。

併し現在の私は、唯プラトニツクな愛を求めてゐますの。

啓子さん。私の今の心境、少しは貴女にも判つて載けて？私が何故貴女に私の経験した事を、少しもお話ししなかつたかとお判りになる？

それはねえ。今迄の貴女が戀愛してゐなかつたからなの。大人びた私の此のお話が、貴女に強く響くのを恐れたからですの。でも今の貴女の心の悩みを知れば、今こそ私も、貴女に私の此の小さな経験も語らずにはゐられなかつたのです。

それは人は誰しも、戀愛を失つた時は悲しいわ。生きる甲斐さへ失ふ人さへも有りますもの。併し、その時、強い理性を働かして、ちつと自分のその戀愛を振り返ると、果してそれが眞の戀愛で有つたかどうかハッキリ判るものよ。

啓子さん、貴女の今度の出来事も、それも人生の一ツの経験なのよ。

併し、戀愛結婚を否定する私でも、眞の戀愛を求める事が出来たら、私のこの考へ方もきつと異て來る事と思ひますわ。

啓子さんも。お互にプラトニツクな戀愛を求めて、そして強

く生きて行きませうよ。さ、もう泣かないで、もつと火の傍へ寄つて頂戴。

(小名濱町上町六八)

……完……

野 道

泉 敏 夫

かの野道を知らずや

そのかみ

スミレ咲くころ

いく度びかそゞろあゆみし

かの、野道を

富 ケ 浦

詩

加 藤 果 奈

春が閉ぢられた欄の中で色着き初める

醗く垂れ罩めた灰色の空

童の咽喉が震へて

空腹は哀傷の涙を流しながら

破れた障子の空しい悲鳴

冥黙せる囚人の沈思の挑戦

足掻きの苦しい緊張

息切れのなかで細胞がうるけて行く

暗い時の投影の笑ひ

素枯れた思想の果の惨めな肉休は

高い睡眠の木蔭を求める

放たれた孤愁の夢

緑の園

冷たい季節の幻覺

私は鬱然として

重苦しい夢に戦く

(四・一一)

「此れが萬開と謂ふんだね」

「幾年振りだらう」

春は裳裾を襲つて

珍らしい聲が踊り出す

曇りの丘

殷かな青空ステージ

子供の唄が昇天した

こぼれた花びら一片

遠い海の紺青に融けた

アイス賣る親父の

にこ／＼した濁聲

(四・二〇)

さ ざ な み

水の精 銀蛾の羽搏き 石、石のもつれ

轉び

陸しく 歌い、叫びて 雲を磨き

光雪いで ときめき 匂ふ

斷層、或は對岸の

季節の大らかな息吹き

(四・一八)

永遠の愛慕

(2)

大浦弘四郎

藝術は神と人間との間のギャップ 人間と他の生物とのギャップの探明である

藝術は生活の生長にともなふ必然的表現である

藝術は生活内容を豊富にしやうとする生活である

藝術は人生を愛し観照しやうとする生活である

藝術は表現欲から生れた作品のみではない、藝術はただ人生の血みどろな体験である

藝術は生活である（山村暮鳥氏は云つた生活のない藝術は耐えらなう）

創造のない藝術は一顧の価値にない

夜はふけました、しかしあなたの宗教観に對して私の私見を述べてこの手紙を了りたい。

H・G・ウェルズの「生命の科學」第三篇を讀んでみると「百年位前迄は今日ある世界は突如として始まつたものである」と一般に信じられて居つた。それは生存するところの生物

創造の話とその時代の物語が原始人の生活を考へる多くの示唆に富んで居る様に考へらるゝのである。動物の凡ては古生代及び中世代に全部發生して各々特徴ある性能をあたへられて強大なる力をもつて生存し、新世代の最終たる鮮新記に至つて生れた原始人は比較的彼等よりは弱い力をもつてこれから強大なる動物の間に生活しなければならなかつたであらう。今考古學上の貴重なる資料となつて居るマンセス象や恐龍の如き強大なる動物が、巨木うつそうとしげつたなかに東西に駆つて居るのであるから原始人は常に生命の危険にさらされて居つたのである。更にはたたく雷鳴と電光、突如としてきた暴風雨や海嘯、彼等は唯驚異し畏怖を感じると共に生命の保全を願つて何かしら自分より強大なるものに頼らうとし亦何もものかを信じてそれによつて慰められたい氣持が働いたであらう。これが原始宗教の姿である。私は考へるのである。更に輝ける太陽、きらめく星辰、花が開き鳥がさえずり、山岳がそびえ、大河が流れて居る。原始人にはそれ等の一つ一つが不思議であつたのであるからこれらを自然と崇拜する心が生れるのは當然の事であらう。ここにも原始宗教の發生理由があるのである。この事はなほ現代に於ても人文の低い未開地に於てはこの原始宗教の形をとつた神を拜して居るところがあるのをみてもわかるであらう。しかしこれ等はたゞ自己の慾望と畏怖から生れたものであつて、社會性のないものであり、現代考へらるる、宗教とはその意味にお

が今日見られる様な凡ゆる生物と共に創造されたものであるといふのであつた」といふ書き出しで、生物の進化について非常に豊富な資料を充分につかつて舊約聖書の創世記やギリシャ、ローマ神話、または我國の古事記、日本書記のやうなものが單なる神話であつて人類は進化の道程をたどつて今日をなしたものである事を詳しく述べて居る。勿論之はダーウキンの「種の起原」を見てもわかる事であるし、資料をもちひずに説話体に書かれたラモン、コフマンの「世界人類史物語」にも簡單ではあるがこの事はわかりやすく書かれて居る事實。今日なほ、あの様な神話や傳説を信じて居る人もあるではあるが、多少なり科學の洗禮をうけたものはあのやうな神話を信する人は恐らくないであらう。地球がガス体から次第に冷却凝固して地球の最大の受難時代であつた氷河時代が過ぎ去つたあとで微生物から進化したのかどうかは私達の知る以外の事であるが、びこり類から進化したといはなく、原始人が生れたのであらう。このネアンデルタール人は僅かに兩足をもつて立つて歩く事が出来る様になり、近代人と比較にはならない幼稚なものではあるが、他の動物よりは優れた感覺と智慧をもつ事が出来た。即ち思考力が生じたのである。この點原始人は一般動物の域から飛躍して脱却したのであるが、その半面非常にみじめな存在であつたと想像せらるゝのである。

この點については、私は進化論者が一篇の神話として片づけて居るギリシャ神話のプロメシアス、エチメシアスの萬物

いて非常に距離のあるものである。

原始人には僅かながら思考力があつた事は前に書いたが、やがてこの思考力が次第に發達する一方、ダーウキンの「種の起原」が述べて居る様に肉体的にも人類は進化の過程をたどり、生活のよき地域を求めて移住し、或ひは牧畜を知り、農耕を覚え、石器時代から青銅時代を経るにしたがつて自然に順應する様になり、これを利用したり、避ける事を覚え、動物を逐次征服してこれを利用して生活する事が出来るやうになつたのである。この時にいたつて宗教も原始宗教の形から次第に發展して宗教的形態を整へてきたのである。この一つの例がセム族の宗教である（V・B・スミスの「セム族の宗教」参照）

更に人類は絶えざる努力をつゞけて生活の高度化を計り、遂に今日の文化を建設するにいたつたのである。これは人類があらゆるものを限りなく探求し、幸福を求めて生活を高度化するものであるからである。創世記に書かれたアダムとエブの神話は全きを求めて智慧の木の実を食つたのである。しかし文化の程度が進むにつれて人間には原始人や古代人にみられなかつた經驗しなかつた自己内部に對する悩みが生れたのである。

印度の王子シッタハルタはこの苦しみによつて出家し、ウパニシャットの哲學の上にたち、バラモンの教理のからを破つて慈悲の宗教を創始し、ナザレの大工イエスはこれを創造主なる神の救ひによつて解決せんとし舊約の律法より飛躍し

て新しい愛の宗教をひらいて十字架についたのである。即ち宗教は原始に於ては自然への崇拜と畏怖から生れたのであるが、文化とともに發達して内部生命の悩みや社會を考へるやうになつて著しく進歩して、形あるものを對照とせず、全きもの一つなるものを對照とするやうになつたのである。しかしイギリスの産業革命に刺戟せられた科學の發達は著しく宗教の必要性を減殺したやうであるが、果して宗教は社會からのぞかるべきものであらうか、一部の人間の間には宗教は阿片であるといひ、宗教を一種の自己陶醉であるとし排撃せられて居る。勿論宗教的要求は自己に對する要求である。しかしそれは自己陶醉や苦惱からの逃避ではないのである。それは西田幾太郎氏が言はれた如く「自己の生命に就ての要求であり、我々の自己がその相對的にして有限なるものと覺知すると共に絶對無限の力に合一して之により永遠の眞生命を得んと欲する要求である」のである。勿論私達の考へる宗教の根本たる神は宇宙の實在であり、その根本であるところのものである。

太陽のない夜と寒さをしのぐために人類は光りと熱とを發見し遂に現代の如き電氣照明や各種の熱の發生裝置まで發展させたのである。しかしそれは太陽の光りと熱とを創造したものではなくして、たゞそれにかわるものを創つたので、太陽そのものは創造出來得ない宇宙の存在なのである。

原子力が發見せられて廣島と長崎はその試験地となつた。

しかも原子力の利用は發見せられたか、原子そのものの創造は出來得ず、これは永遠にその根本をなすところの宇宙の神祕な力なのである。

友よ、こころみに深夜天空を仰いでみたまへ。限りなき星が空にかかり、最もその近きものすら何千万哩もあり、その遠きものは何億光年の彼方にあるのである。アインシュタイン博士はこの宇宙の廣さを何億光年かに測定したが、之等の測り知れない廣さのものが狂ひもなく正しく統一せられて運行をつづけて居るのである。この偉大なる力を考へ、ふりかへつて地上にある小さな自分の存在と考へるときに、どうして神を信じないで居られるだらう。この點私は再び西田幾太郎氏の言葉をかりてみやう「世には往々にして何故に宗教が必要であるかなどと尋ねる人がある。併しかくの如き問は何故に生きる必要があるかといふと同一である。宗教は己の生命を離れて存するのではない。その要求は生命そのものの要求である」何といふ偉大なる言葉である。世界的な哲學者西田幾多郎氏、科學の最もはやかな近代の空氣を吸ひ、新らしい直觀の哲學を思索した氏がその究極に於て見出したものは神であつたのである。それは私達生命の根本である。イエスが考へた神であり、シツタハルタが悟つた佛であり、老子がみた道である。それは不増なものであり不減なものであり過去をもたず未來を有しないものである。その現はれは天空であり、太陽であり、數しらぬ星であり、人類であり、多く

の動物であり亦植物である。いひかへれば私達の生命も亦神の一つの現はれであるのである。私達の生命が神の分化作用であり、その現はれとするならば神と私達は一つのものであり、そこに生きた宗教が生れてくるのである。私はかく考へかく信じたい。「野の百合は如何にして育つかを見よ、務めず紡がざるなり、されどソロモンの榮華の極みの時だにもその装この花の一つにしかざりき」まことにこの言や至言である。野に放置された百合は創物主のたぐみなみわざによつてあの美しき花をひらくのである。一木一草といへどもこれとどこくか神の具現なのであり、一つ一つが見えざる力によつて結ばれて居るのである。この結ばれが愛といふ言葉に表現されるものである。全きもの、絶体なるものの現はれである。故にその絶對なるものを結合せんとする意志これが宗教である。一部である私達が他の一部である生命と共に生きる力これが愛である。こゝにも宗教が生れる。愛こそ宗教の根本をなすものである。

佛陀の物語のうちに富有なる阿難に全部の財寶を供養させる話がある。これは物質への執着を斷ちきつて愛の自覺を與へんための方便であつたのである。ガルバリー山上キリストの血のしたたりは人類にこの愛を知らしめて憎しみのない社會をつくらんとする意圖に外ならなかつたのである。

人類がこの宗教觀念に到達して神を信じ、愛に生きて居つたならば二つの世界大戰は未然に防ぐことが出來、幾百万の尊とい生命があら戦場の露となり、その骨を山野に埋め、人

類が幾百年もかかつてきづきあげた文化財を失ひ、汗とあぶらによつて積んだ財寶を失ふ事がなかつたのである。勝てるものも敗れたるものも共に苦しみ、共にその再建に血みどろな努力をはらつて居るのである。かくの様な宗教は現代に於ても決して不必要ではないのである。

ここにいたつて私は再び君の書信をみた、そしてそこに一貫して流るる君の眞實なる叫びをきいた。君は單なる美術至上主義者でなかつた、現象のかけに流るゝ大いなるもの美しきもの、眞なるもの見出さんとして居る尊といひ人生探求の巡禮者であつた。君は眞實なる生活を得んとして血みどろにたゝかつて居る尊といひ魂であつた。友よ、大空を仰いで大地にしつかりとたどらう。よしやこの身は大地に比しあまりにも小さく、その生命は大空に比してどれほど短かくとも、凡ての現象を正視し、生命を思索するとき永遠にわたる眞實をさへる事が出來やう。それは永遠の愛慕である。友よ、太陽の照る眞晝、或ひは月明るき夜半、靜かに頭をたれて思索しやう。思索に現はれたるものを捉へて永遠にわたる眞實を知らう。生活苦にうめく人間の魂にわれ、共に泣こう、宗教も藝術もそのうちから生れるだらう。

(終)

(筆者は小名濱町役場勤務)

痴人の獨白

加藤 果奈

夜は、いつの間にか地の底から音もなく這ひ上つて來た。午後の晴々した活潑な陽光も、都厚い闇の中で息を引き取つてゐた。曇み込まれる様に時は回轉して、飢渴と疲勞を素枯れた思惟の果の惨めな肉体が挽き摺つて行つた。殘業から放逐された身は樵夫の獨座の様に放神の沙漠を流浪してゐる。野心と瞞着、偽善のなす評價のスケール、之が賦與された彼の仕事場であり、職掌であつた。

太い嘆息は、小兒の腦漿の様に雲を踏みつけていつた。時偶、樂譜を滑る様に汐騒がやつて來て、餘韻もなく流れては去つて行く。知性の領する文明荒地に薄暗い電灯は、やがて石鹼玉の様に統一がふやけて行く。暗い路。戦争の落していつた原罪の冷たい意識。愚鈍な歩みは倦怠るく動いて、寂びれた物象が怪しく揺れる。近代的盲目な囚人に似た不攝生な病的生活の解放に、空前の危機を豫知しながら、限りない淋沫に戦いた。

重い嘘は、ごみ／＼した人界へ吸はれて行く。幽かに襲つて來る春の息吸の中から。低く音丈を並べた屋根裏にても二

ヒリスチックなジャズが吐き出された。金貨の威嚇に脅いた様な哀れな音色で、彼は痛々しく憔悴した背を洩れ灯にぬらして、人情の悲調幽音に聴覺をよせてゐた。それはやがて、歩一歩妖しき優しさを含み、ほの／＼と明るく照らし出された寛ぎを覺えた。みず／＼しく照り映ふパーシンの像。眸の片影がひそ／＼と歩を急がせた。其處には素朴な晚餐が待つてゐる。「これがせめてもの絶望的な藝術的自慰であるのだ憂鬱」、それは、知識人の最も健康な時期なのだ」

此の世界が眞實。美しい灯が點つて、なにかしらほつ／＼と湯上り後の様な愉しさに急に心が温つて來る想。満たされた花瓶の季節を彩絞する未完のモザイク。世代の人の影繪。

舊歡、それは記憶の繪巻物、回想の遠眼鏡。夢と幻想との素晴しいニュアンス。ヴェルの様に青褪めた町で、白痴に近いその歩みは、歪んだ人間の跋行所を脱出して、眼前に横がる地球の風景の極樂境と稱する床しい霞の奥の幸福へ急いで居るやうである。一歩行つて立止まり、二歩行つて振り返へり亂雑と喧騒の己が棲家を郷愁的眸差しが見返つた。冷い夜氣が彼の耳、鼻、口を荒々しく曝して、病的沈鬱な瘦せ細つた軀を搔すぶつた。漂ふ死精の骨片が、犄角にみすばらしい電柱の中段に縊られてゐる。電球が遺髪のように繊細い針金にぶら／＼揺れて危ふく存在を支へてゐるのだ。燃える小さな胸を抱いて、夜の重壓する中に鈍い歩みがうごめく。彼は芳醇な酒精に酔ひ痴れたかの様に、危やしい重心を移して像

になつた劇の悦興の波瀾におぼれて行く。激しく体を揺す振られながら。一ナニ、純潔？ 阿呆な野蠻な潔癖がどれだけの價值があるんだ！一瞬の安らぎをも與へてくれない戀の、世代の反逆兒は叫ぶ。絶えられない犠牲を。陶酔に添ふ影の逍遙に、己れが深くうるむ。身に沁む程寒い町に、痴樂に近い一種の甘い感じが漂つて、吹き卷くる嵐の中になほ一脈の烈しさが残つてゐる。唯々、霧に呆かされた煙草の火のやうに兩の眸だけが夢幻の枝葉を繁らせてゐる。卑俗なモラルに支へられた不潔な人間の駐屯所は、食傷を投げる風に頑く不な理性の釘共が緩みだし、針のやうに鋭い知性の軒端が黄色く青褪めて、がた／＼悲鳴を揚げてゐる。

無限を信じつつ、無限に哀しむもの、それは、無限の幸福への祈禱である。影あるが故に繪畫の美を増すが如く。樂あるが故に苦の陰鬱繁きが如く。一衣帯水、銀色にときめき流れる町の下水。ぬれた孤燈が愁ほしげに瞬けば、山裏は寒氣に破れて、簇生する幾百幾千の草木は急にそよぎを収めて死んだやうに静まり返へる。永遠に足音を竊めて、小猫のやうに忍んで來る時の。痴人の呵々と笑ふ空虚な響。やがて、華麗な幻影の水解する様になら／＼と流れるともなき流れの、不氣味な音もなき調律に、孤愁は再び思ひ出を返して來る。身に迫る慕の様な静けさの中で。不思議な胸の鼓動が、姿なき糸を紡いで忘却への慌しい昔日に戻つて來る。蠟の潜む墓標の裏の生の。果しない瑣漠の沙漠に、嗟嘆に狂ふ終符的呪

の煉獄をのたうつリヤ王の如く。氷に蔽はれた青春の貴玉は、佗しい四面の楚歌に哀しく崩れ去つて行く。片々鱗の言の葉が底をついて凍りづく。深夜に埋れた蒼白な道標の暗木に、彼の規模は憂鬱の苦吟に爛れて。覆ふべくもない嚴しい現實は、緊張し切つたあやまれるポイントに甲走つた苦しい振動を授け與へてゐる。鐵を吹く濤の様に。月を惑はす木枯のやうに。姿なき儂れな思索。悔痕と追憶の綫なす悶ひ。裏切られた愛情。報いられない努力。認められない献身。おお恐ろしきサクソクの演繹。こんな夜に涙を溜めた星でもあればよ、雫を宿して閉ぢられた神祕の、開扉して見ようものを。怪しい觀念に依め込まれた君が情操は、永久に美から遠ざけられねばならない。彼は悲しみの中に鬨争の幕を閉ぢるだらう。苦吟が、美の探究者の敗北の中からふびえる悲鳴である。と謂ふ事をも意識出来ぬ中に。漏斗に酒精を滴たすが如く、刻々磨耗して行く時の輪廻よ。遺瀾ない盲の挽歌。低くそして、高く。映像破れたロマンスの、果敢ない痴人の散策日記噫々、生の破調！

(筆者は港灣會社勤務)

(二四・三・一〇)

人生觀

角野道夫

我々は「休何の爲に生れ、何の爲に生き、そして何の爲に死んで行くのだ？」こんな事はいくら考へたつて判りつことはない。考へるだけ無駄だ。尤もこんなことを云ふとお釋迦様に叱られるかもしれないが、とにかく私は無駄だと考へてゐる。

又此の様な事を眞剣に考へてゐる人はおそらく本誌會員の中には有るまいと思ふ。然しこんな事を考へるより、人間は如何に生きるべきかを眞剣に考へるべきだと思ふ。とにかく我々は生まれて來たのだ。然して生まれたからには必ず死ぬのだ。そこには理窟はない。動かし難い自然の法則だ。人間の力ではどうすることも出来ないのだ。然らばこの法則はどうして出来た？ 誰が創つた？ 神が創つた？ ではその神はどうして生れて來たのか？ こんなことを追つてゐたのでは、きりが無い。こんなことはいくら頭を三角にして考へてみたところで解決のつく問題ではない。

我々が生きて行く上に於て、必要なあらゆる問題の解決への道は唯一、大自然の存在から出發することだ。

我々の世界は唯一つの世界なのだ。この世とか、あの世とかと云つた二つの世界なんか存在しない。そして唯一の大自然

然はそれ以外の絶対者（神）の爲に或る目的をもつて動かされてゐるのではなく、それ自身で過去現在未來へと水久に絶えることのない運動を續けてゐるのだ。だから人間社會に於ける、過去、現在、未來のあらゆる出來事で、動物、植物その他あらゆる自然現象も總て大自然の自己運動の一部に過ぎない。

さて本筋に歸つて、我々は今後、如何に生きるべきかについて、即ち人生觀に就いて考へてゆさう。併し是は實に大きな問題で有る。勿論私がここで述べる迄もなく今日迄多くの偉大な哲人達が眞剣に研究し、討論してきた問題なのだ。然るに未だにこの問題が人間社會全般に通ずる普遍的な問題としては解決されてはゐない。

確かに、人間は人間として共通した生き方をしてゐる。即ち、動物とは異つてゐる。行動し、生活する場合には必ず或る思想のもとに行動してゐる。だが今日迄の人間が、そして現在の人間が、眞に人間として價值のある、そして生きがひのある生活を續けてゐることは考へられない。即ち正しい人生觀のもとに正しく生活してゐると考へない。ここに大きな問題がある。

人はそれ／＼その顔が異なる如く、その人生觀も異なるのは當然で有る。併し人間として眞に人間らしい價值のある生活をする爲正しい指針、即ち正しい普遍的な人生觀が何人にも必要なものにもかかはらず、未だに解決されてゐないのだ。お

そらく今後も絶對的な解決は望めないだらうが、而し解決への道を前進する努力は絶體に必要なのだ。今日迄、否今日に於ても誤れる人生觀、思想のもとに如何に悲劇が起り非人道的な行爲がなされて來たかを知る時その必要性を痛感せざるを得ない。

次にその誤れる人生觀に就いて分析してみよう。長いものにはまかれる的、運命感、諦め感—この様な人生觀の基に、その人が生活し、行動してゐるとすれば、果して眞の人間として價值ある生き方をしてゐると云へるだらうか？ そしてこの様な人生觀の基に、生活を續けてゐる人が未だ／＼澤山居ることは否定出来ない事だらう。現在起つてゐる税金の問題にしろ、供出の問題にしろ、明らかに不當な課税であり、不當な割當だとは何人も判つて居り、その爲にその生活が破壊されようとしながらも、長い物にはまかれろ、或は時の天下に従へ的な人生觀の基にそれに屈從して苦しいそしてユウウツな日を送つてゐる人の如何に多いことか？

次に勝てば官軍負ければ賊軍といふ思想—この様な思想の基に督ての日本軍閥達が或は日本兵達が朝鮮、支那、滿洲及び南方に於て如何に非人道的な行爲をやつて來たかを想ひ浮かべれば、その誤れるところが領けると思ふ。勝者は絶對だ何をしてよいとの思想の基に「南京虐殺」「バタン死の行進」が行はれたではないか！ 考へれば人間として全く恥づべき行爲をしたものだ。これは決して日本民族の殘忍性か

ら來たものだとは考へられない、日本民族は元來人情味のある民族に答だ。それにもかかわらず、この様な行爲を取つたのは日本人の先天的な性格がなされたのではなく、後天的な、その行動を規定した思想、人生觀が誤つてゐたのだ。然して勝つた時には何んでもやつた。併し負けたら何をされても仕方がないとして現在もこの様な思想の基に、即ち「日本は敗けたのだ、だから何をされても仕方がない」といつた考へを持つた人も少くない。これこそ全く奴隷的な、人間性を無視した根性とも云ふべきだ。即ち敗けたら何をされても仕方がないとの考へは、勝てば何をしてもよいとの考へに一脈相通するものなのだ。この様な思想の基に於ては獨立、民主日本の再建などは絶體に不可能な事だ。

次に金に依つて總べてを解決しようとする思想—金がなければ何事も出来ない。金があれば自分の好きな事も出来る。又偉くも見える。そうした考へのもとに金の爲に毎日／＼をキユウ／＼としてゐる人。その目的には手段を選ばない人。勿論現在の世の中に於て金がなければ生活は出来ない事はよく解る。又金があれば確かに生活も樂になり、楽しい事も出来るだらう。それだからといって、金の爲に生きてゐる人間の行爲は全くみにくい。例へばバンバンガールの存在を見よ強盗の存在を見よ。勿論彼女等も彼等も最初から好き好んでそうした道に入つて行つたとは考へられない。おそらくその大半は敗戦後の生活の苦しさからの解放を願つてのことだら

う。だが彼等の考へは誤つてゐる。確かに生活は苦しいだらう。金か欲しいだらう。又個々の事情も有らう！ 苦しきも有つたらう！ 然しその前にどうして人間としての正しい生き方を考へなかつたのだらうか。あるいは考へる餘裕すらなかつたのだらうか。それとも考へる能力をも失つてゐたのだらうか？ あるいは又正しい生き方を掴んでも意志の弱さから安易な道を選んだので有らうか？ いづれにしろ、人間として正しい生き方をしなさいことは事實だ。

次に地位と、名譽の爲に生き様とする人生觀。我々の幼い頃の教育は、學校に於ても、家庭に於ても凡て大人になつたら偉く成れる教育だつた。大臣に或ひは大將に成るんだと確かに一ツの望みをもつて一生懸命努力することは良いことだ。而し何人も何の爲にといふことを忘れがたかつた。その他位と名譽の社會的意義をしつかと把握することをおこたつてゐたのだ。そして前にも舉げた手段を選ばない方法がとられることも少くはなかつた。

權力の前には何時もビク／＼しながら自分の地位を守つてゐる卑屈な行動。下の者には、自分を偉くみせようとして豪ばり散らす行動。是等は凡て定みにくい行爲で有る。

未だ／＼舉げればいくらでも例はあるが、とにかく人はそれ／＼の人生觀に依つて行動してゐるのだらうが、以上の如き人生觀は全く誤つたものと斷ぜざるを得ない。然らば上記の他に、一体正しい人生觀があるだらうか？ 前に述べた如く、純粹に正しい人生觀はない云へるのだ。然し少くとも現

在それに近い人間として眞に價値ある生活を送るべき人生觀がないわけではない。そして正しい人生觀の基に、正しい生活を續けてゐる人の居ることを忘れてはならない。正しい人生觀、それは正しい世界觀を把握して初めてつかみうる。然らば正しい世界觀とは何か？ 難しい問題になるが要するに我々が生存してゐる唯一の世界を、客觀的に正しく理解することだ。(勿論世界には自然界も人間社會も含まれる)その爲には先づ今日迄我々を支配してゐた古い觀念をきつぱりと捨て、素直な氣持に歸つて物事を見るべきだ。その様な氣持で自然を理解しようとするならば自然も心よくその本當の姿を表はしてくるたらう。

我々の存在は大自然の存在の一部分だ。だから我々は自然と無關係に又それと關係にある人間社會と無關係に生きて行くことは出来ない。そして自然界も人間社會も含めた大自然は休みなく運動し、變化してゐる。これは普通の頭を持つてゐる人であれば誰だつて頷ける全くあたりまへなことだ。正しい世界觀とはこの大自然の運動、變化、そしてそれを動かしてゐる法則を正しく把握することだ。

大自然には絶對的なもの、神聖なものは何一つ存在しない故に、舊日本帝國憲法の第一條「天皇は神聖にしておかすべからず」は全く自然の法則に相反する誤つた世界觀からもたらされたものであり、この様な誤つた世界觀の基、非人道的な侵略戦争が起され、外地に於ては何百萬の人類を殺戮し、

親を、夫を、子を、兄弟を殺し、祖國を破壊と混亂の中に落しやつたのだ。今や天皇に對する絶對感消失し、新憲法が施行され、嘗ての神聖天皇も今は人間天皇として再生しようとしてゐる。

正しい世界觀、正しい人生觀を持つことはその人個人にとつても民族にとつても將又人類にとつても極めて重大なことだ。我々はこれから生きる上に於て古い觀念に基いて行動したり、權威に屈伏したり又社會の動きを無視した個人的な利己的的人生觀から出發した行動ではなくして自然の一部として而して社會の一員として社會の進歩發展と自分の幸福とを一致させようとする人生觀から出發することだ。

その爲には今日迄の社會が如何に運動して來たか、そして現在の社會が如何に運動してゐるか、そして如何に運動してゆくかを、そして又それを動かしてゐるものは一体何であるかを正しく把握する事が大切な。日本の歴史も、世界歴史もそれを續くと判るが、そこには常に古い勢力と新しい勢力との闘ひが見出される。そして新しい勢力は古い勢力に勝利を占め、歴史は前進させ而して發展させて來た。現に古い勢力と新しい勢力との闘ひは今も世界の凡ゆる所で續けられてゐる。新しい勢力とは、その時代／＼に於て人間の生活に必要な物の生産に従事してゐた勤勞階級に基盤を置く勢力であり古い勢力とは一般には特權階級であつた。即ち社會を前進させ、發展させて來たのは働く人達だつたのだ。そして現在

も働く人達は社會の前進と發展の爲に努力を續けてゐる。たがその流れをおしもどそうとする勢力もなか／＼強い事は否定出来ない。今やその兩者の闘ひは激烈を極めてゐる。我々は兩者のいづれに屬するのだらうか？ 私も、そして諸君も新しい勢力に屬する人々に含まれるだらうが、ここに到つて我々の人生觀ははぢめてはつきりして來るのだ。即ち社會を前進させ、發展させ、眞に働く人達が豊かな幸福な生活が出来る明るい美しい社會を建設せんと努力する、その過程に於て我々は人間として眞に生きがひのある價値ある人生を送ることが出来るのではないだらうか？ その爲に働く人々が皆んな仲よく團結して、或る場合には確かに苦しい時もあるだらう、つらいこともあるだらう、一人で好き行動をとつた方が樂なこともあるだらうが、然し、美しい社會を作る爲にその苦しみを乗り切つてこそ眞に新しい人間としての生き方があるのではあるまいか？

悶

え

黒澤

秀雄

交はる友も無い他郷！ 獨り貴女を偲びました
貴女と別れて、遠い所へ來た事が
貴女を私から引き離して行く様は
もしそうなら、そんな時の私は、
まるで闇の中に朱玉を落した、人の様に
歸らぬ實を求めて、巷をさまよい歩くことせう。

創作

縁ありて

檜山大三

ごろ／＼と暴れ狂う闇夜の森を一人の青年が謎を包む怪奇の「赤い家」を探し歩いている。時折、青年は立止つて方角を見きめ様とする。

何處かで、けたたましい夜鳥の聲、フト立止つた青年は地底から呼ぶ様な無気味な人の叫びを耳にして恐怖に歪んだ顔が畫面にクローズアップされる……。

櫻の花の舞ひくる春の一日、私はT市で映畫「赤い家」のスリルに酔つてゐた。

「此處、空いております？」と言う女の聲にスクリーンの恐怖感から現實に引戻されて「ええ。どうぞ」と頷きながら見上げると、暗さに慣れた私の目に均整のとれた身体にツーピースが、びつたり似合つた女の横顔が映つた。

だが、身に着けた春の服装とは、およそ不似合な程、彼女の顔色は蒼白く、何處さとはなく落着がなかつた。

二十四、五？ いや或はもつと多いかも知れん。子供を抱えて生活苦に喘ぐ未亡人の萬策つき果てた姿？ だとすれば女は余りにも弱いものだ。然しそうしなければ一家の者が明日のパンを得られぬとしたら女の辿る道は只一つしか残されてゐない。

勝手な想念に耽つてぼんやりスクリーンに見入つてゐると何時の間に煙草を口にしたのか彼女は不意にライターをともした。

思ひきつて振り向くと蒼白く疲れた顔色の中に、さみしげな瞳がうるんで消えた。

私は自分の想念か余りにも判然と的中した様に思えて心の奥底にうづく本能よりも、そうしなければならなかつた彼女に隣れを憶えた。

そして、つい昨日片言を喋る様になつた長女と妻の三人、庭先で遊んでゐた折、餌を與えてやつた、ひなびた乳房の垂れた野良犬の姿が鮮やかによみがえつて來た。

「犬になんか、ご馳走する事はないよ」と言ふ私に「だつてあの乳房をこらんなさい。仔を生んで間がないのよ歸ると子供たちに乳房をせがまれるのよ。其の時おっぱいは出なかつたら、貴方どう思う？」妻は口を尖らせて抗議した母性としての妻の眞剣な抗議に私も思はず胸つまる想ひで三人の夕食の爲に残してあつた残り少ない飯びつの中から芋飲を分けてやつた。

「此の人にもきつと子供が待つてゐるのかも知れん。そして

煙草をくわへて、さり気なくマツチを足元に捨てて追うともなく瞳を落とす、ストッキングの美しい脚が、かすかに震へてゐる様に思えた。

私は何かを暗示されている様な豫感がしたので態と無關心を装つてスクリーンに見入つてはいたものの心の中に芽生えた妙な豫感を掴もうとする神経だけは鋭く彼女の方に働かせてゐると、果して暗さに慣れて來た彼女の視線が、につと私の横顔を覗いて來るではないか。

（夜の女？）私は春の戯れの如く心の奥底にうづいて來る一つの想念に駆られて見た。

（彼女の美しいストッキングの脚が、そつと私の脚に觸れて來る。ハンドバックに置かれた指が少しづつ私の膝へ伸びる。）私の想念は更に飛躍して見る。

（それにしても脚の震えは何とした事だらうか……年齢は

金が欲しいのだ」私はそつと胸のポケットを押へて見た。

「ある！」と私は心の中でつぶやき乍らも、何ぞかして一人でも此の様な女を明るい生活に立直らせなければ、と言う氣持と、反對に本能の想念から起る今一つの醜い私の心が争つてゐるのを意識して愕然とした。

それは恰も懐中の金を押へ、中にある金高と相手の女が要求あるであらう肉体の代價とを胸算用しながら、怪しげなネオンが明滅しあちこちの暗がりで一夜の肉体の取引をする男女の群。強く快樂を刺激する酒と脂粉の香の流れる街々を、うろつき廻り本能と理性との相こくに苦しみ悩んでいる男の姿にも似ていた。

そんなに長い時間ではなかつたが、何かから解放された様な氣配を感じて彼女の方を覗くと何時の間にウツラ／＼と居眠をしていて彼女の指から抜け落ちた煙草の紫煙が強く私の鼻を突いて來た。

「相當疲れているんだな」と思つたが先刻からの想念を捨て切れないでいた私は、それも誘惑へのテクニクではなからうかと一應疑つて見た。そして椅の肘懸に置かれた彼女の腕に態ど靴を持ち換える風を装つて自分の肘を觸れて見た。然し彼女からは何の反應もなく軽い新さゝ立ててゐるではないか。若し假に、彼女が私の想像した様に隣れな未亡人であつたとしたら、今此處で支える何物かを與えぬ限り一人で泥沼に落ちこんで仕舞うのは明かである、と言つて私にはそれを救う程の力も有り相にない、否！今私がポケットに押えて

いる何千圓かの中、幾らかでも分け與えたとしても彼女は素直にそれを受取るだろうか、彼女は其の代償として自己の肉体を授け出して来るに相違ない。

それが生活に疲れ果てた女の歩む豫定のコースである事を私は幾度となく耳にしている。私は昨日の、野良犬の憐みを乞うた目色と、食べ終つてからの尾を振つて来る、あの姿を彼女の上に置き換えて想像し暗い氣持に襲われ、ポケットの金を押えた手を離した。

館内に電燈が灯いて、出入の人々のさわめきに目ざめた彼女は、私に軽く會釋を残して人群を縫つて出て行つた。

突き放された氣持で見送つていた私も、突差に後を追つて出た。彼女は出口の所で放心した様に突立つていたが、やがて緩く歩き出した。

蹣跚とした其の歩き方は夢遊病者の如く、グラリと垂れた右腕、左手に下げたハンドバックの奇妙な揺れ方。それでいて茶のツーピースのびつたり似合つた姿態だけがマネキン人形の様に美しくかつた。

彼女は殆んど前から来る者を意識しないかの如くフラ／＼と歩いて行つた。

とある四角で私は思わず「アッ！危ない」と叫んで駈け寄つた。勢よく走つて来たトラツクの前へ彼女は其の儘、進んで行くではないか

「氣をつけれ！此の野郎」トツクは急カーブを切り罵聲を残

「O町で九の」「O町と言うとI縣の？」「ええ」「僕もO町なら知つていますが西町？東町？」

「私、西町ですの」

私は一應彼女の答が正しいかどうかを試みて見た。幸ひO町には元戦友だつたKが居て來月十五日は町の祭禮だから是非遊びに來ないかと、手紙が來ていた事を思ひ出し

「O町の漁の景氣はどんなでせう。たしか春祭も今頃だつた様に憶えていますわ」

「ええ、五月十五日なんですけど、濱も不漁で今年の祭は、さみしいと思ひますわ」

二人は、どちらからともなく驛に向つて歩き出していた。話し合つている中に少しづつ彼女の言葉の生氣を取戻して來るのが感じられた。

「先刻、誰かとお逢ひになる約束だつた様でしたが」

「でも、もう良いんです。どうせ來ない事は始めから判つていましたけど……。若しやと思つて……、女つて弱いものね」

「そうですか？」私は曖昧な返答を返しながらも彼女の此の言葉によつて總てを了解出來たかに思えた。

「O町から今朝一番でM市へ出かけたの、M市であの人と別れる時、さつきの場所ですつ事を約束して……でも私は別れる時からみんな出鱈目な事は氣がついていたの、人間の氣持は其の人の目を覗けば直ぐ分るものですわ」

彼女は、私の目をみつめて其の時の事を回想するののか強く唇をかみしめた。

して去つて行つた。

私には彼女が死を決しているか或は非常な失意に打のめされてゐるかに思えたので人群も忘れて

「失禮ですが何か心配事がお有りでは？」と聲をかけた。

「ええ？いいえ」瞬間彼女は困惑の表情を浮べて立止つたが、「いいえ、なんでも有りません」力なくつぶやいて歩き出した。

「僕は斯う言う者です。先刻映画館で、貴女の隣りにいたのですが大分つかれていらつしやる様でしたし、あの四ツ角みたいに間違でも起されるんではないがと思つたものですから」

私は名刺を渡しながら憐れみの目差しを彼女に注いだ。つかれ切つた顔に春の微風がおくれ毛をなぶらせていた。彼女は私の名刺を見て非常に驚いた表情を見せたが

「私、此處で逢う約束になつてゐるんですけど仲々來ないんですでも決して御心配なさらないで下さい。御親切ほんとに有難う御座いました」

「大分おつかれだと見えて居眠りをしていらつしやつたでせう、旅先でも？」

「私、随分しう態でしたワ。あんな處をお見せして」

彼女の疲れ切つた顔に、ほのかな微笑が漂つた。弱々しい感じ、それで割合に、はき／＼した口調で答えて来る、涙ぐんで笑つた顔が「原節子」を思わせた。

「お家は、どちら？」

車中彼女のために、やつと席を見つけて薦めるさにはかむ様にして腰を下し

「三人掛出來ますわ」と私を見上げて微笑んで見せた。此の分ならば沈み切つた彼女の氣持を何とか明るい方向へ引戻す事が出来る様に思え私は努めて明るい話題を持ち出した。

彼女の住むO町へ戦友だつたKを訪ねての歸途、終列車に乗り遅れた揚句、六里餘の夜道を一人で歩き乍ら自分の足音に驚いた事や、道標の白さに、ぎよつとして冷汗を流した事など話している中に彼女も一緒になつて口を當てて笑ひ聲を立てたりする様になつていた。

「今日は、眞すぐO町のお家へお歸りになるでせう？」私は彼女が家に戻つて呉れる事を念じ態とそれを意識づける様にしてたづねた

「今夜はI驛前の松屋旅館に泊らうと思つてますの」私は一寸驚いた、I驛で私も降りるのだから

「松屋旅館は、私の遠縁になつていますので今夜は其處で緩くり考へて見たいと思ひますの」

私のポケットから手帖を出して彼女を元氣づける文字を汽車の動揺でみみずの様にと走らせた。

（間違を起すのではないかと心配の餘り失禮をしました。どんなに苦しくとも明るい人生を夢みて生活して下さい。餘り考へ込んで寝不足などは体に毒です。さあ元氣を出して立上つて下さい）

ピリツと破り取つたはづみに手帖に挟んであつた長女のお

かつは姿の寫眞が彼女の膝に落ちた。

「アッ……」彼女は素早く手に取上げ

「子供さん！いくつですの、可愛いでせうね」

「ええ矢張り自分の子はね。親馬鹿つて奴でせうかね」

汽車はぐつとスピードを落して一驛に入つて来た。

「さあ、一驛ですよ」私は促す様にして立上つた。彼女は複雑な表情で私を見上げ

「私……貴方のお仰言る様に真すぐO町へ歸ります、色々

と御親切に有難う御座いました」殺した様な聲で斯う言つた

かと思ふと私が破り取つて渡した紙片をしつかりと掌に握り

しめ矢庭に窓邊に突伏して仕舞つた。

そんな事があつて三日程して私は、O町若松良子と女文字

で達筆に書かれた封書を受取つた。それには次の様な事が書

かれてあつた。

過日はT市にてお目にかかりました折はいろ／＼とお心づ

かひを頂き有難く存じ上げます。昔の人も「つつめども色に

出にけり」と書いてますけど思ふことあれば矢張り姿かたち

に現はれるものと見え、見も知らぬ貴方さまにまで、御不審

を抱かせ御心配をいただく様なことになりました。

でも、たいした事では御座いせん。此處四五日仕事の方

とブライヴエートの事で少々神経を使ひ過ぎたものですから

ブライヴエートの事と申ししても、申上げますと長くな

りますので要點のみを認めまして御安堵を願ふ事に致します

あと半年も致しますと私も母となる身で御座います。處が

最近になつて急に相手から冷たい態度を示され、貴方とお逢

ひしました、あの日を最後に遂に私の元から去つて行つたの

です。「僕は子供なんか要らなかつたんだ欲しかつたのは君

の肉体だけだつたよ」私が身体の異常を打明けた時、そんな

事を平氣で言う様になつていました。いつその事私の体ごと

何もかも目茶々々と貴方が御心配下さつた様な事を考へて

ゐた私で御座いましたが、貴方にお逢ひしまして話合つてい

る中に幾らかそんな氣分から抜け出る事が出来、あの無邪氣

な子供さんの寫眞を見ました時にやつと立直る決心を握る事

が出来ました。

他の人ではなく貴方にお目にかかれたのも神が私たち母子

に生命を恵んで下さつたものと感謝しております。

数々の御厚情身に沁みてうれしく存じます。またお目にか

かれる事もあらうかと存じますが、その時は見違はえられる

程元氣になつてゐる事でせう。子供を抱いて。

では右御芳情の御禮まで亂筆にてお許し下さいませ。末筆

ですが御寫眞の可愛い子供さんの御多幸を祈らせて頂きます

かしこ

瀧山 良司様

若松 良子拜

二 仲

かつて戦前、私瀧川良子と申して居りました(別に結婚に

依つて姓が變つた譯では御座いせんが一寸した事情が有り

まして) T市で御名刺を拜見して世の中には似た様な名前の

お方もあるものと感じました。

こんな處にも矢張り御縁が御座いましたのか知らなどと考

えております。

24 15 11 日記 (終り)

筆者ハ石城郡泉村玉露住、水澤松次氏

父兄會を阻むもの

S 生

この誌上を拜借して、こんなことを書くのはよいか悪いか

相當迷つたが、本誌が眞に文化國家再建の先端を行くものな

らこの使命達成の一助として敢て拙文を托するものも恐縮では

ないと考へる。ただこれから書かんとするものが果して本誌

の使命に適應するかどうかは疑問である。もし適應せざるも

のとすれば深くお詫びする。然し何れにしろ間接的には關係

のあるものと思ふ。

我々の歩む處必らず疑問が生ずる、殊に長い間封建主義國

家として生長して來た吾國に於ては猶更である。この疑問、

この隘路を開いて行く處に吾々が口に叫ぶ民主主義社會が

誕生するのではないかと考へる。

疑問は飽く迄徹底的に究明しなければならぬ、現代社會に

は、まだまだこの疑問が存在しているものと思ふ。

筆者の住んでゐる所は農村である。小名濱町には直接的に

は受け容れられないかも知れない。云うまでもなく筆者は教

員である。

父兄會——私は某學年のB級を受持つてゐる。受もつてゐる

ことは大いなる責任がある。この大いなる責任を完遂させる

ためにはどうしても學校と家庭、更に社會が眞にスクラムを

組まねばならぬ。こんなことは今更茲で述べるまでもなく明

らかなことである。それ故父兄會を開く。開くのはよいのだ

が招集する父兄はたつた數人にすぎぬ。何回開いても訪校の

父兄は一定してゐる。このこともただ農村の父兄は教育に無

關心であるが斷言するのは果してよいかどうか。この間は識

者に譲するとして何故父兄會を父兄自身が阻んでゐたのかこ

う考へて見ることにする。

教育が今更如何なるものであるか茲で論述するまでもなく

万人誰もの認めたものであるから農村の父老連と云へど分ら

ぬ筈はない。だがそう思ひ乍らも抑教育がなにか吾々からよ

ほど縁遠いもののように思つてゐるに違ひないと思はれる傾

向があることは嘘いつわりのない事實であるようだ。そして

自分はこの傾向を卑下する、何故ならば敗戦後の社會に於て

我々日本人の進むべき道は文化國家再建の何物でもないから

だ。日本が眞に自立し世界各國と共に交際して行くには先づ

文化の充實である。

一口に云う文化の充實、この課題については種々論議検討

されねばならぬが、然し何れにしろ視界を常に廣く持ち國際

狀勢に遅れてはならない。こう云うことは今更茲で殊新しく

論述する迄もないから省略するが、本村のような農村がまだ

過去の固い封建主義の殻の中に閉ざされてゐるは今更現代の

社會には適應しないのである。敗戦後教育も過去の殻を破つ

て新教育六・三制實施へ進んだのであるが、この結構な話しも種々難多な隘路に打突かつて理想通り進展しない。その一つとして父兄の教育に對する理解と協力が足りない理由が擧げられた。偶々新聞第三面を賑はす學生の芳しからぬ行動、これらが大概家庭側の無關心から來る場合が多々あることを銘記せねばならぬ。

然し父兄が義理人情から訪校出來ない場合がある。嫁と姑の關係が先づこれである。嫁の方は教育に對して非常に理解があり積極性であり乍ら姑が幅をきかしている封建主義下の家族制度に由來する家庭も相當數あると聞く。慨嘆せざるを得ない。

また家庭側が余りに成績に拘泥しすぎて、放任する場合がある。これなど農村の父兄として最も悪い原因であると思ふ成績が悪かつたら何とあして少しでも立派な人間にしようと努力するのが親としての義務ではなからうか、こう云う子供こそ成績のみならず操行が悪い、余りに親の無頓着なのに一驚する。少し附け加えるならば一學期間に學校に足を運ばせる父兄は多くて二、三人である。正に驚く勿れである。勿論學校側にも或程度の責任がないでもない、何れにしろ學校側が新教育に積極的に熱意を示しても父兄側が素知らぬ振りをしているようではその差は零であると思ふ。父兄側の一考を望むと叫び度い。また農村の隘路は労働面である。朝から晩まで食糧増産のため活躍せられる農村に於て文字通り暇のな

い忙しさである。學校へは是非行き度いが色んな仕事か山積してゐるとはよく耳にする言葉である。だがいくら忙しといへど一年中三六五日そんな忙しさに忙しかる暇はない何か都合があつて外出した時位學校へ廻られた筈である。但し父兄會は一學期間中にせいぜい一回か二回位である。せめて教育をよく理解しているものなら何と出席されたわけである讀者の中には、では何故家庭訪問をやらぬのかと思ふ人も居るだろう。吾々教員は云はれる迄もなく果敢に實施してゐる處が如何に小さい村とは云へ多數の兒童を受持つてゐるからには家庭訪問も仲々容易ではない。それより父兄會を開くことに依つてすべての議事が進行して行くのである。事茲に至つてよもや家庭訪問と父兄會が何れがどれ程重要であるかが分るのである。

この他留守番が居ないから行けぬと云う親も居るだろう、現在の様な物凄世の中では勝手に家を開放しにすることは出来ない。

この他としても種々都合が悪いとのことで訪校出來ないとなれば父兄會を開いて數人しか來ないとなげくのは愚な話しになつてしまふ。だからと云つてこのままの状態を續けるなら教育の民主化は到底望めないことになる。

教員は今こそ農村父兄の啓蒙開發を凡ゆる角度から行ひ、この隘路を打開する様努力せねばならぬ。それにはまだまだ時日を要するかも知れない。然し民主的教育を實施するには是非必要なことなので教員は一應この問題を掘り下げ討論すべきだと考へる。父兄會を阻むものゝ。學校側も父兄側も今こそ眞剣になつて反省すべきチャンスに到着している一終一

(二四・四・初)

新會員紹介

本誌は先月以來、新會員を迎へる運動を中止してゐますが、左記の方が御入會なさいました

小名濱町榮町

東北海運局小名濱支局

泉中學校

與田 薫

同

小名濱内燃機製作所

同 船引揚

角野 逸夫

同 内郷町内町

仲 繪三郎

同 五ノ五

佐々木 昭二

同 小名濱町落

黒澤 秀雄

同 同

鈴木 國久

同 平市柳町

宇佐美 踏

花を待つ感想

八十翁

雪ハ解ケ、山ハ笑ヒ、草ハ萌ヘ、水温ム。兎角スルト梅ハ眞盛リニナツタ否少シク盛開ハ過キタレトモ各梅園トモ暗香殊影雅人ノ心ヲ迎ヒテ曳杖ノ人絶ユル時ナク、路地ヲ見レバ垣根ノ黄梅モ咲キ亂レ、裏庭ノ桃モ笑ヒテ呈スル。鰯デ櫻モ時侯トナリテ安達太郎嶺ハ雲トモ見エ安達原ノ雪トモ眺ムルノモ近キ内デアルガ、阿隈川ノ堤ノ柳モ青々シテ長閑カサ堤上ニハ花見客ヲ當テ込ミ露店軒ヲナシ、客ヲ呼ビマツ茶屋ハ花見ノ支度ニ忙シ工夫ヲ凝シテ居ル。(ボート)ノ競走、花見ノ遊覧船、茶屋ニハ藝者モ晴衣姿ニテ人目ヲ引キ花見手拭花見簪花見ノ目簪等ノ如キモ各店共ニ呼賣ニテ賣聲高ク花見客ヲ迎フルコトト思フ。安達原ノ公園、二本松假ケ城公園モ時節人ノ出巡ルコト幾何ノ豫想以上ノコトト思フ。諸賣店ノ(ペンキ)塗りノ看板廣告又壽司團子、櫻餅ノ匂フ、今ヨリ手引艇引客ヲ釣リ込ム準備萬端何ニシテモ春ノ日麗カ朗カ實ニ良イ期節ダ。醉ヒ期節ダ。(櫻らさくら足すめすに七廻り)

二四年四月 (二本松町田中吉太郎氏 八十歳)

ふきのこと摘み

ふきのことを摘みとすれど袖ぬれて春また浅し安達太郎の里

春雨にぬれて色添ふ咲く花に霞む臘の月を閑けき
春雨や晴れて山路の流れ川雪解け水に木葉流るる

朝風に匂ふ座敷に本を讀む窓に入り来るサフランの花
山路の假宿に宿れば月影寂し夜からすの啼く

御山路の袖が伏す屋に宿れば月影寂し夜からすの啼く

朝々に嶺をはなれぬ春霞遠山櫻今に咲くらん

大河の水のど切れはあるなるに細谷川に水や豊な

吹雪を衝く

(第五回)

東 義 將

二三、お春とお瀧(つづき)

靜子は驚いて、

「まア……嫌で御座いますわお姉さん……そんなこと無理ですわ」

「いゝねエ、ただそんな話を持ち出したよ。大丈夫よそんな事、もし万一の事があれば、福井さんに相談をするから、ホラ、ゆーべ大島さんとお店に来てゐたでせう。あの入よ。福井さんは大島組の人だけど、あの人は曲つたことは大嫌いで、弱い者は助けて呉れる人だから、大ていのことは福井さんに相談すれば大丈夫よ」

「はアいろ／＼と御心配をかけて済みません。それにねえお姉さん。先日もお話した様なわけで、私達が逢い度いと思つ

「その方がいいわ。妾も淋しいけど、本當はこんな話の起つてゐる矢先きに、どんなにいいか知れないわ」

「ゑゑ有難う御座います」

「妾も何につけても澤井(うち)が歸れば安心なんだけれど」

「本當にお姉さんも御心配で御座いますわねえ。ちきにお歸りにはなるんでせうけれど」

「ゑゑ有り難う。妾も仕方がないから、もう成行に委してゐますの。明美さんの様なこんな綺麗な優しい人に想はれる人本當に倅せな人だわ。きつと、立派な良い人に違いないわね。」

靜子はその言葉に恥らしい氣に目を伏せると、お春はその姿を優し目にじつと見て、

「本當に明美さんは美しいわねエ。それにそのコート良く似合ふぢやないの」

「はアお蔭様で——」と

靜子は嬉しさうに答へたが、それは四日前程靜子のやさしさを知つたお春が、彼女がコートもなく通ふ様子に、「妾は幾枚もあるのだから——」と彼女の爲に派手な一枚を與へたものだった。

未だ新しい麤脂に白い二線の格子縞で長身の均勢のとれた彼女の姿に良く似合つたものだった。

ドワーを開けて女給の一人が顔を出した、

「あのウ、マダム、お客さんが皆んな明美さんと呼ぶんです

てゐた人に、逢へる様なことに成りましたし、それで父も母も安心して今朝の汽車で發ちましたの」

「あら、やつぱり歸んなすつたの」

「ゑゑ、八時四十分の汽車で御座いました。お姉さんにと／＼お目にかゝらずに發つてしまいましたけど、呉々もよろしくと申しまして——」

「まア。そう。妾こそ知らないものだからお見送りもしないで、ちやアちきに明美さんとお別れねえ」

「はア本當にお世話になりましたけど、多分そうなるだらうと思ひます」

靜子もさすがに目を伏せる。

けれど——

お春が答へるより先に靜子が振り返つて、

「はアすぐ参りますから——」

「では」とニツコリと彼女はお辭儀と共に、お春の前を離れた。ぬいだコートを羽織と共に袖だたみして押入の棚の隅にそつと置くと、傍らの柱鏡を女らしく一寸のぞいて、その儘ドワーを開けて彼女の今の職場にと出て行つた。

一四、町の酒屋屋

雪は無かつたが實に寒く曇つた晩だった。ちきにちら／＼降り出すに違いない。人通りは有るが大通りの商賣屋は、みんな表てのガラス戸を閉ぢてゐる。況して飲食店などは、家の中の氣温の暖かさで、水蒸氣の爲に表てのガラス戸を中からびつしよりと濡らしてゐて、ガラスへ黒く書いたそれ／＼の屋號をまるで洗つてでもゐる様だ。そして人の出入りの度に吐き出される湯氣は、まるで風呂屋の戸でも開けた様で有る。

此處はユニオンから程離れた大通りに面した「一寸一杯」と云つた様な居酒屋の中である。

刻んだ生ねぎの臭い丈が強い。

「なにをツ！ お酒は一人當り二本づゝだ、一ふさけるね——Y町の太島の身内が三人たかつて五本や十本の徳利で黙つて歸れるかい！——親父！ もつと持つて来い！」

喚いてゐるのは三人連れの鰻夫姿の男達で、太島の身内な

ぞと叫んでゐるのを見るとたまには、こうして働いてゐる者も有るのか、割合廣い土間の中に、五ツ六ツのテーブルを据えて、他の客はおとなしく飲んでゐるのに、此の三人丈がさつきから、規定の量以外の酒を要求して騒いでゐる。

調理中の五十五六の主人の傍らで、十七、八の少女が怯へた様に主（あるじ）に

「ね、旦那どうしませう?!」

主（あるじ）も彼等に注意の目を向け乍ら、

「五本も余計に出して有るんだもの駄目だよ。なに、あんな事を云つて、又借りだとかなんだかねかして、只飲みで歸ろうと云ふ腹さ。」

小聲にそうつぶやいたが、すぐに大きな聲に彼等に、

「あの、申譯け御座いませんが、毎度申上げます通り、何分規則がやかましいもので御座いますから、もうそれで一ツ御勘辨願ひ度いで御座います。」

三人の中の一人が振り返つて、

「冗談云ふねえ。これつばかりの酒で、酔へるかつてんだ。規則もくそも有るか。持つて来い!」

「持つて来ねえとたゝつ破すぞ!」
別の一人もそう叫んだ。そのくせ彼等も既に相當に酔つてゐる。

主人が困り切つて、

「でも皆さんには、大分余計に差上げて有るんですから、是

以上はもう!」

「何をツ! 余計に差上げて有る、をウツ、俺達は何も、只で飲もうと云ふんぢやねえんだぞ。二本や三本内緒だなんて持つて来やがつてなんでい!」

一人がそう怒鳴つた時、表てのガラス格子ががらりと開いて、入つて來だ客が有つた。

それは町に用事でも有つて出掛けて來たのか春日將三が相變らずのスタイルに、今夜は山田一人が従いて來てゐる丈だつた。

三人の男達は、ふと春日と山田の姿に一才口をつぐんだが二人が「酒を持つて來て呉れ。」と傍のテーブルを前にして掛けたのを見ると、再び前の様に喚き出した。

主人がそれにもかまはず、春日の方に向つて、

「あの、お酒は、お一人に二合丈で御座いますすが宜しう御座いますか?」

と、念を押した。

「あゝ規則通りで結構だよ。熱くして呉れ!」

春日が答へると、山田が言葉をついで、

「無理は云はねえから大丈夫だ!」

先の三人はふと互に顔を見合はせたが、先ず勝算の見込みも無いのに酒の勢で、一人が、

「何んだ! 無理は云はねえつて、一をウ、いやに當てこすつた事を云やがるなア!」

山田に向つて怒鳴つた。山田は笑ひ乍ら、

「アハハ當てこすりぢやアねえ、本當の事だ。併しおめえ達もそう判つたら、あんまり無理云つて親父さんを困らせるものぢやねえ。」

「何をツ! しやれた口をきくねい。一賣る喧嘩なら買つてやらア。やい! 表てへ出る!」

山田は唯笑つてゐる。春日は振り返つて、

「兄半達、冗談を云つたんだ。まあ勘辨して呉れ。」

にこりとせすに彼等を見据へる様にして言葉を掛けられた彼等は、大島の身内と云つても、誰も春日を知る者は無いし、かつたが、春日の瞳に何か氣壓されるものを感じて互に暫し口をつぐんだ。

二人の前に徳利が二本運ばれた。彼等は里芋の煮付けか何かでもうその連中の事などは忘れた様に何か話乍ら、さしつさされつやつてゐる。間もなくそれも飲み乾して、お變りのお調子が又二本運ばれた。

例の三人は先程から無言で、その様子をちら／＼と見てゐたが、彼等がそれもそろ／＼飲みほす頃、中の一人が、

「をウツ、此の儘黙つて歸る氣か!」

春日等に聞えよがしに仲間云つた。

「べらばうめ。黙つて歸れるかい。俺が話をつけてやらア!」

一番、丈の高い男がひよろ／＼と立ち上つて、山田の傍にやつて來た。

「をウ兄（あん）ちゃん。俺達はなんの何がしと名乗りは擧

げねえが、此の町でも一寸うるせいさむらいなんだ。何處の馬の骨か判らねえおめえ達に、しやれたセリフを聞かされて黙つてしつこんでゐられねえ玉なんだ。済まねえがおめえ一寸、顔を貸して呉れ!」

いきなり山田の片腕を取ろうとする。
「馬鹿野郎! よさねえか!」

山田が軽く突いた筈なのに、酒を呑んでゐると、大きいくせに腰が極まつてゐないので、はすみを喰らつて、ツデンと後ろへしつくり返り、腰掛けと共に仰向けに倒れた。

他の二人も、

「やりやアがつたな!」

と、立上つたが、でもそれは少しも殺氣ばんだものではなく、むしろ仲間のその態（さま）にびつくりした形だつた。

三四人居る客が、驚いた様に互に顔を見合はせてゐる。

春日はちつと山田のやつた事を良いとも悪いとも云はずに見てゐたが、すぐに小女を目で呼ぶ紙ハレを出して手早く支拂を済ませた。

「をウ! 兎に角表てに出ろ!」

相手方は起き上つた男を加へて、三人がどか／＼と表てに出かつた。主人が慌てて、三人の中の一人の前に立ちふさがつて、

「あのウ、お勘定を!」

その男は、ふと目を尖らしたが、自分を見てにや／＼と笑つてゐる山田の視線にぶつかるど、しぶ／＼とツボンのポケ

ツトからくしや／＼の五圓札を一枚出すと

「是つきりねんだ！」

吐き出す様な云ひ方に、主人の手に握らせて、「飲み逃げちやねえんだぞ。」と云つた一瞥を二人の方へ残すと、その儘、他の者のあとを追つて是も表てに出て行つた。

春日と山田はゆつくりと、主人や小女に禮を云はれ乍ら、彼等が待つ筈の外に出た。

三人とも七八間先にかたまつて、ちつと立つたままこつちを見て、口もきかなければ、手出しもしないで居る。

春日が笑い乍ら言葉を書けた。

「お互につまらねえ眞似は止め様ぞ。俺達は用が有るから御免蒙むるぞ。」

その時、通りの向ふ側を歩いて来た女が有つたが、その様子を見るとつか／＼と三人の方へ寄つて来て、

「お前達、何をしてんのさ！」

と聲を書けた。

「あ、姐さん！」

三人が、變りばんこに頭を下げた。

女はお瀧だつた。外出の途中らしく、なりは一昨日ユニオンを訪ねた時と同じ姿に、今夜は天候悪しと見たのか手袋をした片手に、細い蛇の目を持つてゐる。

「お前達、たまに鱧山「やま」に入れば良い氣になつて、歸りにはもうろくな事をしないんだろ。どうしたのさ？」

「何ねエ、何處の野郎か知らねえが、あいつ等があんまり出

と、歩き出した。

「あ、もしー」

お瀧が何か聲を書けた。山田が、

「兄貴、呼んでますぜ。」

春日は立ち止つて振り返り、

「何か、用ですか？」

「一貴方は、先日パスでお目にかかつた方で御座いましたわねエ。」

お瀧は二三歩、春日の方へ近寄つて来て云つた。

「先日パスで？」

春日が一寸思ひ出さずに居ると、

「そら、一昨日(おととい)若×邊町からお乗りになつてー」

優しい聲を作つて云ふ。

「ああそうでしたわ。一で、未だ何か御用ですか？」

「いえ、一あのウ、一寸貴方にお話申上げ度い事が有るんですが、一何處かその邊へ一寸、おつき合ひ願へませんでせうか、一口(ひとくち)差上げ度いと思ひますからー」

語尾を少し舌先を甘つたるく云つたが、春日は眉をひそめて、

「さア何の御用か知りませんが、見づ知らずの貴女に御馳走になる理由も有りませんから、まあ失敬しませうー」

身を返すと、もう山田と共に肩を並べて、さつさと大通りを歩いて行つた。

お瀧はちつとそれを見送つたが、

しやばつた口をききやアがるから、今引きすり出した處なんですよ。」

一人が強がつた説明をした。

お瀧はふと顔を向けて、春日の顔を見たが、ハツとした様に柄にもなく顔を赤く染めた。併し、すぐに三人に向つて、

「冗談ぢやないよ。お前達の様な間抜けに、引きすり出される様な人が居るものかね。」

コートの胸元から紙入れを出して、紙幣(さつ)を一枚抜き取ると、

「是を持つてお前達は他へお行き。」

中の一人に手渡した。

「どうも姐さん済みません」

口々に禮云つて、むしろ助かつたと云はねばかりにホツとした形で、春日の方へはもう目も呉れず、町の彼方に消へて行つた。

お瀧は春日に身に向けて、につこりと、

「どうも済みませんでした、氣の荒い者はかりで。さぞ失禮な事を申したでせう。」

媚ひる様な挨拶のし方をした。春日はその様子を妙に思ひ乍ら、

「なーに、大した事はないです。お宅の人ですか、いや却つてこつちが有り難う。」

言葉を残して、

「さア山田、行こう。」

「へん。何を云つてやがんだい！」

と、ふてくさつたつぶやき方をしたが、

「でも妾の此の手に乗つて来ない奴はなかつただけど、一口惜しいけど、見れば見る程本當に男らしい男だよ。」

お瀧は獨り言しつゝ、大通りを行く二人の姿を尙も見送つてゐる。

その時後ろで暖聲(しやがれこゑ)がした。

「をや姐さんお待ち遠うさま。先に歸つたさばかり思つたのに、こんな所で待つてゐて呉れたんですかー」

近付いたのはお虎だつた。今夜も共に出て来て、又質屋へでも行つて来たものか、大きな風呂敷包を胸元にしっかりと抱へ込んでゐる。お瀧はそうしたお虎をまるで汚らしいものでも見る様な目付きに眺めて、

「小母さん。妾しやア一寸、寄り道が有るから、お前さん一人で先に歸つてお呉れ。」

言葉を残すとお虎の返事を持たずに、さつさと歩き出して春日の行つた方角へ、小急ぎ向つて行く。

お虎は呆氣にとられて、

「なんだねエ姐さん。本當に薄情だよ。」

いま／＼しげにそうつぶやいたが、重そうに胸の包みをひとゆすりすると、是も同じ方向にちよ／＼と歩き出した。

向ふから四人連れの男達が、何か話乍らやつて来る。

「此の頃おめえ明美の奴、莫迦に何んだか嬉しそうだぜ。ヤツ、色男でも出来たんぢやねえかな。どうも氣に成つて仕方

「がねえや。」

「そうつぶやいたのは先夜ユニオンで大島に嚇かされた中の相變らず炭塵で目の縁を薄黒く染めた男だった。」

「大分、銀行の齋田なんか夢中で来ておやがるが、まさかあんな野郎ぢやアねえだろうな。」

「そう云つたのは、いつかの晩もみ上げを切つて血をにぢませてゐた、自分丈が色男ぶつた男だった。」

別の一人が口を出して、

「そうた、齋田の奴、昨夜（ゆいべ）明美や照子の前で、報國債券に二千圓とか三千圓とか當つたが、あらましが、又債券で貰つたから、そのうちに現金に換へたら君達にも何かプレゼントするなんて云つておやがつた。それも人に一度自分が賣つたのを又無理に買ひ戻させられたのだと云ふぜ。」

「チエツ、何を云つてやがんだか判るもんか。いい加減の話だよ。いふん。そんな事で俺の明美が、へー、俺の明美でもねえけれどヤツがそんな事で氣を動かすかつてんだよ」

「自稱色男がそう云ふと、はちに並んで歩く一番年の若そうな「大張り子」の様な顔をした小男が、ぼそ／＼とした聲で「兎に角、明美の惚れてゐるのは、俺達の仲間ぢやねえな」と、あんまりはつきりとした事を云つたので、もみ上げの血の色男が、急に立ち上つて、

「をウ、おめえ丈、此處から歸れよ。」

尖つた聲で犬張り子にそう云つた。

「五、福井雷太郎登場

春日は酒に暖められた頬を、冷め度い風に吹かせて却つてこち良く、フーバーのボタンを掛けぬ姿に、兩手を乗馬ツボンの前かくしに入れて、山田と肩を並べて歩いてゐた。

氷の様な道だった。併し町の人々は、何しろ雪にも氷にも馴れ切つてゐるので、況して、そろ／＼年の暮も迫つた宵の口。大通りはかなりの人出だった。併しそれでも人々が買物に立寄る商店のガラス戸は、人の出入りには必ずびたり／＼と後を閉ぢられてゐる。

横手の道から、酒にでも酔つてゐるのか、足もとをふら／＼とさせた男が一人、春日の方に向つてやつて來た。その男の千鳥足が、よろ／＼としたと思ふと、春日の体にどしんとぶつかつて來た。その男の方で却つて一二歩はね返る様に後に退つたが、

「すみません」とべこんと一ツ頭を下げると、うつ向き加減に春日の横手を縫つて、又ひよろ／＼と歩いて行く。

五六歩行つて春日が、ハツと氣付いた様に立止つて、

「をうツ、待てッ！」

振り返つて、その男へ呼びかけた。男が却つて急ぎ足に成つた。山田もハツと氣付いた様に、

「野郎！ 待てッ！」

叫んで置いて後を追をうとした。その時春日の後方からやつて來た一人の男が、いきなり自分の前に飛んで來た今の男

に、忽ち片手が延びたかと思ふと、もうその襟がみごとツと掴へてゐる。茶皮のデヤンバーを着て、やはり黒皮長靴に足を固めてゐる。がつしりとした大きな体で、年頃は三十三とか、整つた容貌の男だった。

掴へられた男は、

「な、ななにをするんですい！」

山田が近付いた。デヤンバーの男が、

「此の野郎を、お返ししますぜ！」と、聲掛け乍ら、掴へた男をぐんと、山田の方へ突き離れた。片手は上着のかくしに入れた儘で有る。よろ／＼と自分の方へ戻つて來たやつを山田が手を延ばして捉へた。その男の上着のポケットへ手を突込んだが、直ぐに黒皮の札入れを取り出して、

「兄貴、やつぱり掏摸（すり）でした！」

春日を見返つて彼の紙入れを示した。掴へた山田の手がその男から離れると同時に、ビシリその男の頬が鳴つた。山田の片手隠りだ！

「よせッ！ 山田！」

春日の尖つた聲だった。山田はハツとして次の打つ手を止めた。併し男はへた／＼とそこへ座り込んでしまつた。

春日は男に近付いたが、優しい口調で、

「君。立てよ。一見つともねえから早く立ちな。」

「へい。」

男はしほ／＼と立ち上つて、拔けた片足の下駄を履き直してゐる。年は未だ三十そこ／＼か、髪も延び切つて、まばら

な髪が薄汚い。それに實に粗末な服装だった。背廣とは名のみで、縫ぎはぎだらけの上着で有る。下には襟元迄の毛糸のセーターは着てゐるが、それも黒い所へ、赤や黄色のよせ集めで編んだもので、とうに、駄位は抜けてゐるだろう。作業ツボンをはいてゐるが、つぎと汚れで、膝頭の所がボコンとふくれて、まるで股引きの様で有る。

「おめえ、掏摸（すり）なんて粹？ な稼業にしては、一寸なりが悪いな。」

春日が笑ひ乍ら言つた。

春日が笑ひ乍ら言つた。

「へい。申謝け御座いません。一どうか、御勘辨なすつて」「併し、手際は悪いが、満更の素人（しらうと）ではねえやうだな。」

「いゝ。そんな事は御座いません。一普段の貧棒暮しの處へ年の暮に迫つて、嬌あには長く寝られるし、子供は腹を空かして泣きやアがるんで」

男は涙でもこぼした様子で、片袖で目をぬぐつてゐる。

「アハハ、さんだ梅田雲積だ。」

春日は何氣なく笑つたが、併し心では、此の血色の悪い瘦せた顔の、況して此の姿の男を見つめては、そんな言葉も彼には信じられて來るのだつた。

「まあいいや。是からはつまらねえ眞似は、もう止めるんだなア。」

春日は山田から受取つた紙入れから、四五枚の拾圓紙幣を抜き取ると、

「是を持つて早く行きな。」

「いゝ、とんでもねえ。」

「患らつてゐる内儀（かみ）さんが居るんぢや無かつたのかい！」

春日が笑みを含んで言つた。

「へえ。有り難う御座います。」

男は感激して、目に涙を溜めて春日を見つめたが紙幣を受取つて何度も頭を下けてゐる。

もう人だかりも大分してゐる。春日は氣付かない事だつたが、丁度ユニオンの斜め前の所だつた。

「旦那、どうかお名前を。」

「アハハハ、おめえ仲々芝居氣が有るな。筋書き通りだ。いゝから早く行きな。」

「旦那ッ！ 御恩は忘れせん！」

男は頭を下げて、人混みの中に混れて行つた。

チャンバーの男は兩手をかくしに入れた儘、頬に軽い笑みさい浮べて、ちつと立つてそれを見てゐる。

春日はその方をかへり見て、

「大變なお手数を掛けました。」

「いや、とんでもない。併し、いい事をなすつてやりました」

男はにつこりと言葉を返した。春日を思はず微笑んで、

「いや、あの男も此の先きはどんなものですかア。」

山田も共にその男へ禮言つて其處を離れた。暫く行つて山田が言つた。

「お兄さん。今、お店の前で何か有つたんですか？」

「なに。掏摸が捕まつたんだ。」

「まあ！」

彼女は靜子と顔を見合はせて、大袈裟な表情を作つたが、既に立去つて行くその云ふ男へ、

「お兄さん後でいらつしてねえ！」と言葉を掛けた。答へもなく立ち去る男の後姿を、ちつと見送つてゐたが、ふと傍らの靜子をかへり見て、意味もなくにこりとした。二人の姿はユニオンのドワーの中にかくれた。

併し、思へば福井と呼ばれた男こそ先にユニオンのお春の口から靜子にも語られた、あの大島組の參謀格、福井雷太郎で有るに相違ない。

その時、道の反對側の暗がりから動き出した人影が有つたお瀧で有る。お瀧は、さつきの居酒屋の前から、何んの爲か春日の後を追つて來たものに相違いなかったが、それ丈に彼女は其處に身を隠して今の一切を見てゐたものに違ひない。

彼女は首を返して、春日の行つた方角を暫く見送つてゐたが、やがて思い返した様に、ユニオンの方へ近付いて行つたそしてその姿はユニオンの裏口へ廻る管の小路の暗がりに見えなくなつた。

一六、ユニオンに來る客

先夜の手紙を受取つて以來の靜子の心は實際明るくなつてゐた。父母に別れた事は淋しかったが、でも直きに春日に會

「併しいつも思ふんだが、兄貴は本當に優しいア！」

「何？ 今のこゝか。なに。あれもやつぱり俺が貧棒人の子だつたからよ。」

「いね、兄貴。今のチャンバー、いやに感じの好い野郎ぢや有りませんか！」

「全くだ。仲々立派な人だつた。」

雪がちら／＼と降り出して來た。

その雪に、無帽の髪をはらはせ乍ら同じ言葉をチャンバーの男がつぶやいてゐる。

「見かけねえ男だが、感ぢのいい男だなア。あれで今の盗人（ぬすつと）も一度や二度の悪事は食ひ止められるだろう」

その時、ユニオンのドワーが開いて、客を送り出して來た二人の女給が有つた。

寒そうに袖口から袖口へ手を通して、胸を抱く様にしてゐた一人の方が、チャンバーの男を見とめると、

「あら！ 福井の兄さん、いらつしやいます。」

嬉しそうな聲を擧げた。もう一人の女給も軽く彼へ頭を下けた。それが靜子だつた。福井と呼ばれた男は、それへ軽く會釋を返したが、初めの女給へ、

「いや別に此處へ來たわけぢやアねえが！ 兄貴は來てゐるのかい？」

「いいえ。大島さんは、今夜は未だお見えに成つてゐませんわ。」

「ふーん、そうか。では、たつ川だらう。いや有難う。」

へて！ 彼女は未だ春日の名さへも知らなかつたが！ 直きに彼に會へるといふ樂しさが自然、彼女を明るくした。

宿では主人夫婦の他に話し合ふ者も無かつたが、！ 靜子の居る宿は、宿屋とは名のみで、泊り客などは極く稀で、まるで素人下宿と云つた様な家だつた。他に相客は一人居るには居るのだそうだが、やはり炭礦夫か何かか、時間の遠いから今迄、靜子は一度も出會つた事がなかつた。尤も長家を改造した様な家で、主人夫婦の部屋と、宿の出入口を中心にして右と左に別れてゐて、炊事場から洗面所さへも異つてゐたので、暫へ泊り客が有つたにしても、靜子の方の側の部屋で無い限り、人に顔を合はさずに済むのだつた。

父母の歸京した後の毎日は、靜子は店に行く前の時間を獨り自分の座敷で、父母を案じ春日を想つて、彼の爲に！ 此の頃編み出した薄ねすみの毛糸の襟巻を編み續けるのが、せい／＼だつた。又それが今の彼女にとつては何よりも喜びだつた。

店に居ても、今迄は余り多く語つたり、笑つたりする事の少かつた彼女だつたが、此の頃は心の喜びが自然表てに現はれて、勢い少しは明るい態度も見せてゐた。

勿論彼女がそうした明るい氣分に成つた事を、友達仲間ばかりか、來る客さへ感じずにはゐなかつた。

今夜もカフェーユニオンは、どのボツクスもうづめつくして、その殆どが彼女目當ての客だつた。

彼女は今、銀行勤めの齋田といふ、！ 女給達からサイダ瓶

と仇名されてゐる男で、一是も熱心に彼女を指命で来る客の傍らで品(ひん)良く相手になつて彼の言葉を聞いてゐた。

齋田は二十七八の、未だ獨身でアパート暮らしをしてゐるのだそうだが、身をやつした背廣姿に、少しばかりしやくれた顔にクリムをてら／＼とさせて、頭髮をチックカボマードで、こつてりと固め、櫛目正しく七三に別けてゐる。黒様の目鏡を掛けてゐるが、何んと云つても目が細過ぎた。糸筋の様な目で有る。体が細長く成程、サイダ瓶の仇名を裏切るものが無い。

先き程からの話らしく、齋田は言葉をついで、

「ねー明美さん。僕は自分の口から云つてはなんだけど、今の青年としては真面目な方(ほう)だ。だと信じてゐるんだ。ねえ、僕が、どんな気持ちで君に接してゐるか、明美さんだつて、大てい判つて呉れると思ふんだ。實際僕は、君に逢へて初めて理想の女性に巡り會へたと思つてゐるんだぜ。いねえ明美さん。此の間僕がお願いしたあの事は駄目かしら!」

齋田が莫迦にお客でもない様な口のきき方をした。併し是は別に齋田が靜子に借金のお申込みをしてゐるわけではないのだ。彼は先日、靜子に彼女の寫眞を是非一枚呉れといふので有る。併し靜子は、いくら自分がサイダ瓶の理想に叶つても大して嬉しい事ではなかつたし、況して寫眞の事なんかは忘れてしまつてゐたので、

「あ、何んの事だつたでせうか? アパートへ、ギターを開きに來いとおつしやつた事ですの?」

「あ、ああ、それもあるんだけど、いや、その方も是非明美さんに實行して貰ひ度いんだよ。併しそれはそれとして、ほら、明美さんの寫眞を是非一枚貰ひ度いと、お願いした事さ。」

靜子は彼の厚かましさに心に呆れ乍ら、うつ向加減に自分の袂をつまぐつて、

「でも妾。寫眞は一枚も持つてゐないのですもの。」

「だからさア、僕と一緒に寫さうといふんぢやないか。ねえ、それに明美さんは北海道が初めてなんだから、二人で札幌に遊びに行こうよ。いい所だぜ! ねえ、それ位はマダムだつて許してくれるだろう? 明美さん、僕は金の無い男ぢやアないんだぜ。いそれとも明美さんは、大島さんに氣兼ねしてゐるのかい?」

「いよして下さい。大島さんのお話なんか!」

靜子が眉をひそめてそういふと、

「あ、御免。悪かつた。」

如何にも彼女のその答へが嬉しかつた様にしきりに悦に入つて、

「失敬した。君が大島さんを嫌いな事を、ついうつかりしちまつた。併し無理ないね。實際不愉快の人種だもの。唯僕は、彼がいつも君を獨占する事が實際腹立ちを覺えるんだよ。」

まるで小説にでも書く様な言葉の使い方を、如何にも彼女の愛情を勝ち得た様な感情に浸つて、身を起すと鼻うご

めかして、サロンの中を一渡り見廻した。

後ろのボックスで、先き程の拘模の一件を、まるで、初めから終り迄見て居た様に誰かしきりに話をしてゐる。

齋田は再び身をかがめて、今度は彼女の肩に覆ひ冠ぶさる様にして、まるで内緒話でもする様な具合に、

「そんな事より明美さん。君は此の頃莫迦に朗らかそうだし、僕は君が、僕の気持ちを判つてくれて、そのう、つまり君が僕を好きになつてくれたと解釋してゐるのかしら?」

靜子はもう、それこそ、そんな事より、うつとりと、春日の事を思い浮べて、いお目にかかれたら何んと言おう。あの方も妾に何んとおつしやるかしら、いなどと、そんな事を考へてゐた最中だつたが、ふと今の齋田の終りの言葉にびつくりして顔を上げ、

「あら! 妾。貴方を好きだなんてそんな事!」

思はずはつきりと本當の事を言つてしまつたので、今度はサイダ瓶が驚くよりがっかりして、

「ああ、ヤツバリ君は、僕の事なんか考へてはくれなかつたんだねえ!」

彼が心から恨めしそうな聲を出して、如何にも惱ましげにして芝居氣なつぷりに、テーブルに片腕を突いて、その手で我が髪を掻きむしるのを見ると、さすがに靜子も取りつくしまもなく、

「済みません。」

と、氣の毒そうに消へる様な聲を出した。

併し齋田はけろりとした顔を上げて、

「併し明美さん。僕は照ちやんから聞いたんだけど、君、なんだか此の頃。毛糸の男の襟巻を編んでゐるんだつてねえ。一体誰に贈るつもりなのさ? いまさか相手の無い事ぢやないんだらう?」

「……」

靜子が答へずに居ると、

「照ちやんは多分、齋田さんのでせう。」などと云つてくれただけ、本當にそうなら僕はどんなに嬉しいか知れないし相當のお禮はするつもりだがなア」

靜子がそれにも答へる事も出来ず、ちつとうつ向いた儘、仕方なしに、やはり袂の先をつまぐつてゐると、齋田は又言葉をついで、

「ねー明美さん。君、まさか、いつも来る鑛夫の中のあのノツボぢや無いんだらうね。いあんな男と、もしかの語でも起つたとしたら、僕は君の爲に心から忠告するぜ!」

靜子は思はず、

「まさか!」あんな人、と續ける處だつたが、慌てて口を閉ぢた。

その時入口のドワーが開いて、

「いらつしやいませ!」の聲と共に、靜子のいふ「まさか、あんな人」の當の本人が、四人の先頭に立つて、何んにも知らずに、ニヤ／＼とし乍ら入つて來た。一番ケツに、犬張り子も兎耳の先頭の男に先程の無禮を赦されたのか、是も嬉

しそうな表情一杯に、のこ／＼と入つて来たが、一渡り四邊りを見廻すと、今度こそ忠義顔に、

「をッ。座る所がねえぢやアねえか」
大きい聲でそう言つた。

彼等は先程、表で、お瀧とすれ違つた時には、誰も酒の氣もなかつたのに、今はユニオンの高い酒を助ける爲か、何處かそこで、コップ酒でもしつかけて來たと見えて、四人が四人共赤い顔をして、さも上客の様に反り返つてゐる。唯その體丈が、それ／＼に靜子の在る所（ありか）を求めてゐる。

カウンターの裏では、お瀧がマダムのお春を相手にストロブを中にして、腰を掛けて話をしてゐる。彼女の手の届く所には、中型のコップに色の良い酒が注がれて有る。お瀧が女だてらに一杯やつてゐるので有る。

お春は休の調子で店に出ない一人の女給に簡単な作りものや、酒のかん、傳票の受け渡しを委せて、自分はお瀧の前に話合つてゐる。お瀧は片手では敷島を指に挟んで、しきりに煙りの輪を吹いてゐる。

お瀧が薄笑つて言つた。

「ぢやア、あの話もふいかねえ」

「あゝ、そんなわけであの人も、直きに東京に歸る様に成ると思ひますから、姐さんもあの話はおの儘にして置いてやつて下さい。妾も未だ何んにも聞かせて有りませんから。」
「そうかねエ。そんな男が居たのかね。」温和（をとな）し

きりつとした顔立ちの人だそうですよ。」
「へゝ大層な迷いだねえ」

お瀧はそうつぶやいたが、ふと先程の銘酒屋の前で會つた男。一昨日、バスの中で會つてから妙に氣を引かれて、忘れられなくなつてゐるあの男の事がふと腦（あたま）に浮んだ。併し、あの男はいくらなんでも、明美なんかに相手になれる肌合（あは）いぢやアないと、自分から打ち消してはみたが、どうも妙に氣に成つてならなかつた。一掏摸に、ものを言つてゐた時の、あの男の樣子の良いつたら有りはしない。一しかも、あの男も、掏摸にあんなに金をやつた。一自分の紙入れを盗んだ奴に、腹を立て様ともしないで、あんな金をやるなんて、一もしかしたら、明美の情人（をとこ）とはあの男の事では有るまいか。

お瀧は、心で自分で勝手に想像を巡らしてみて、どうにも氣に成つてならず、併し口ではさり氣なく、

「マダム。一休あゝの娘は、今何處に寝泊りしてゐるのさア？」

「あの一松野さんの所で御座います。」

「な一んだ。あの宿屋に居るの。」

「あゝ、なんでも此の町に來るとすぐ、自分達で採したとかで」

「ふーん。一兩親は歸つちまつて、あそこに一人であつてわけなんだね」

お瀧は鼻の先きで答へる様な言い方をしたが、併し心ではさつきの男と明美とを結び付けて考へると、自然嫉妬めいた

い様でも、仲々油斷のならないものだねエ。」

「いゝ。そんなわけでもないらしいんですよ。何しろあの人は、相手の人の名も所も知らないんだそうですよ。」

「だつて、何んだか變な話ぢやないか。第一ねエ。今時そんなまどまつた金を、名も言はないで二度も三度もくれる男なんて有るものかね。きつとそこに何か有るにきまつてゐるさ」併し、話の様子ぢやア、うちの大島もその男を見た事は有るらしいんだね。」

「あゝ、何んでもそんな話で御座いますよ。」

お春は靜子から何もかも聞いては居たが、態とお瀧の前にはそんな風に言葉を濁した。お瀧も無論大島からは春日の事を聞かざる譯もなかつたし、あの角田にしろ、青森での出来事は仲間から聞いて知つてゐた筈なのに、是もお瀧には隠して語らなかつたので、お瀧は更に大島が北海道に歸る途中での出来事などは知らなかつたのだ。

併し、靜子が此の町に居なくなる事については確かに氣を良くした。それにお瀧にしても、靜子の美しさは認めないわけにはゆかなかつたのだ。

「併し、あれ丈の玉に、そう慕れるなんて、一休どんな男だろうねえ。どうせ、あんな娘の見る目ぢやア、きつと色の白いのつべりしたお平（ひら）の長芋見たいなきやしやな野郎にきまつてゐるんだらう。」

「いゝねエ姐さん。それがねえ、何んでも休の大きな、立派な人で、如何にも氣性のしつかりした様な、

ものを覺えたし、又それとは別に、どうしても明美を此の儘で置く事が、何か忌々（いま／＼）しくも有り、又何んとなく惜しくも有り、ぢつと何か思い巡らしてゐる風だつた。

「お春はハツとしたが、お瀧は既に靜子を横目に見た後（あと）を、態と素知らぬ振りをしてゐる。」

お春は仕方なく
「明美さん一寸。こちらが大島さんの姐さんなのよ。」

（續く）



合併號發刊に就いて

三月半に、突然平活版所から炭燭の仕事で多忙の爲、四月に入らねば印刷が出来ない由を知らせて来ました。

四月號の準備がすっかり出来て居りましたのに、困つてしまいましたが、幸に仙臺の鶴田印刷所の御助力を得て四月號を發刊する事は出来ました。

併しその間に日數の空きが出来、四月號が四月二十日の發行と成つた事は申譯けありませんでした。

右様の次第で、本誌は、唯、月に追ひ付く爲にのみ、五月六月を合併號として發刊致しました。併し是は豫定したものでもなく、又催しでもありませんので、別に内容に變化はございません。

況して五月は、私が個人的の用件で、些か多忙で、三十枚程を豫定した隨筆「日本築城考」を書き上げる事が出来ず、自分でも残念に思ひ且は同人も鹿野氏と小野榮の作品があるばかりで、殆ど全部會員諸兄の御投稿のお蔭と言つた具合で、甚だ申譯けなく思つて居ります。

卷頭の文の終りに港の灯も永くはないとの申譯けない事を申して居ります。是も上記の如く、私が自分の事で多忙に成りますと現在發刊に就いては誰方からも御協力を戴いてゐない關係でどうしても間に合はなく成るのでございます。

それに、港の灯の同人に書かない人ばかりが集つた事も大きな矛盾でした。

書かないのか書けないのか其處までは存ちませんが、事實私は本誌同人の中では鹿野幸二郎氏以外に眞に書く人を知らないのです。

本誌が今日まで作品の發表を續けられました事は、一重に投稿を下すつて、本誌を維持して下さつた、一般會員の人々のお蔭です。

その人々と共に、全會員諸氏には常に心から感謝申上げて居ります。(終)

(前號。「吹雪を衝く」を會話中に切つた事をお詫びします。)

東 義 將

同人雜誌「港の灯」

主 幹	東 義 將
同 人	新 兵 衛
同 人	四 家 兵
同 人	根 本 治
同 人	近 藤 角
同 人	拍 浦 卓
同 人	小 鹿 二
同 人	小 野 榮
同 人	小 野 山
同 人	加 藤 順
企 劃 部	一 幸 克 豐

毎月一回 二十五日發行
投稿締切 毎月十五日
原稿、文筆ニ關スルモノ
凡テ自由
入會金 四十圓
會 費 六十圓

福島縣小名濱町船引場四三
編輯人 東 義 將
發行人 鶴田印刷所
宮城縣仙臺市清水小路三六
印刷所 鶴田印刷所
發行所 同人雜誌「港の灯」

株式 金子建鐵工業所

取締役社長 金子 磯五郎

本社 福島縣小名濱町準人二〇七ノ一
電話(小名濱) 二五三番
出張所 藤澤市片瀬町二九三二番地
電話(片 瀬) 三二二番
出張所 横濱市井土ヶ谷町中町二四番地
工場 横濱市西區岡野町二四番地
工場 福島縣小名濱町準人二〇七ノ一

運輸省指定旅館



小 瀧

渡 邊 キ ヨ 子

電話(小名濱) 一〇三番

御宴會には是非郷土の歡樂郷鎮泉旅館「小瀧」を御利用下さい。
御宴會團體御宿泊等御豫算で格安に御引受け致します。
湯本街道バス「小瀧」前下車
小名濱町中心ヨリ徒歩二〇分

旅行者指定食堂

恵比須屋食堂

柏 浦 角 治

小名濱町船引場四三

(小名濱驛前)

商談、又は汽車のお待ち合はせに御利用下さい

アラユルゴム製品の修繕は

大評判の新田で

ゴム靴、タイヤ、チユウフ、地下タビ
運動靴、軟式野球ボール、水 枕
各種ゴムベルト、修理ト切ツギ

小名濱町定西二八二驛前通り(西へ約三丁)

新田ゴム更生所

昭和二十四年五月二十五日印刷
昭和二十四年六月一日發行

同人雜誌「港の灯」

第一卷 第五號